

寝取られエロゲ世界にTS転生したら幼馴染が竿役間男だった件について

カラスバ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エロゲタイトル『闇に蕩かされる愛しい花束』。

なお、竿役の間男は催眠能力と時間停止能力を持っているハイパースペックチート野郎とする。

何それなろう主人公か？

この作品はカクヨム、小説家になろう様でも投稿しております。

目次

Summer holiday

エロゲ世界に転生したいと思っただ事はありますか？	1
催眠シチュは本人がその事に気付いていないのが至高	4
見えないところにロマンはあるし、見えたら見えたで眼福である	

9

小学生を無礼るなよ？	18
------------	----

スク水は年相応でも良いし多少きつなくても良い	22
------------------------	----

運命との出会い	26
---------	----

小学生なりの願望	31
----------	----

ある意味ズルする事も醍醐味	36
---------------	----

アブラゼミの鳴く頃に	41
------------	----

セイウンスカイ	47
---------	----

Fall in one

キッズスペースのあかり	53
-------------	----

秋が終わるその時まで	58
------------	----

イドバタバタバタ	62
----------	----

初めての大切な記憶、靄が掛かる	67
-----------------	----

ブルーローズを手折る様に	71
--------------	----

獣が鳴く頃	75
-------	----

刹那の決着	82
-------	----

変わり者の二人	86
---------	----

どこまでも普通の君は	92
------------	----

Snow step

雪、香る季節	95
--------	----

歯車合わせ	103
噛み合わない歯車	99

Summer holiday

エロゲ世界に転生したいと思つた事はありますか？

寝取られで脳を破壊される者は多くいる。

しかし俺の場合最初から寝取られ性癖を持っていたのでその脳が破壊されるというのが良く分からない。

あるいは最初の時点で破壊されたのか。

なん、だと……？

そして一言に寝取られと言ってもそこにはいろいろなジャンルが存在している。

催眠、お薬、時間停止、触手。

人によつてはそれは寝取られじゃねえと突っ込む過激派もいらつしやいますが、俺に関してはすべてウエルカムでした。

性癖が広いとも言う。

ともあれ寝取られと言つても色々なタイプがあり、そしてその中でも割と広範囲の性癖をカバーしている名作エロゲが存在した。

『闇に蕩かされる愛しい花束』というタイトルのエロゲだ。

現代を舞台にしたエロゲですが、普通にファンタジー要素が出てくるゲームでもあります。

いや、なんで現代が舞台なのに触手が存在してて間男が催眠とか時間停止させてるんだというツツコミはしてはいけない。

エロければ良いのだ、エロければ。

このエロゲが秀逸なのは程よいストーリーと抜き要素が両立している事だろう。

寝取られにはやはりバックストーリーがないと面白くないが、それがくどいと正直面白くない。

そして抜き要素は当然あつた方が良いのだが、あり過ぎるとダレる。

そのバランスがちようど良く、だからこのゲームは寝取られエロゲというニッチなジャンルでありながら神作エロゲとして多くのエロ

ゲーマーから認知されたのである。

あるいは多数のエロゲーマーの脳を焼いたとも言う。
さして。

それはさておき、話は変わるがこういう話をされた事はないだろうか？

『生まれ変わるならばどんな世界が良い？』という質問だ。

これはつまるところマンガとかゲームの世界に転生してみたいかって質問だ。

勿論好きな創作物に転生したいものは多いだろうが、しかし場合によつては例外がある。

例えば死にゲー世界とか。

そりやあもう当然である。

そんな死にやすい世界に転生したいと思う奴はそうそういないだろう。

その点、エロゲ世界と言うのはなかなか答えが別れると思う。

女性の性欲が旺盛な世界とかに転生してやりまくりたいぜ！とかそんな希望を持つ者もいるかもしれないが、しかし俺の意見は「お前、転生しても陰キャだぜ？」である。

つまりは女の子と話せるのDTTって事だ。

ただまあ、エロゲ世界の住人ってみんなえっちで美少女だし、眼福だからって理由だけでも転生する理由にはなると思う。

だから、と言つてはなんだが。

俺は転生するのならば『闇に蕩かされる愛しい花束』の世界には一度行つてみたいと思つていた。

それは俺が男で、もしかしたらワンチャンあるかもと思つていたからとも言う。

ちなみにこのワンチャンというのは、間男のおこぼれを預かってヒロイン達と○○出来るかも、とかそういうゲスな奴である。

そんな最低な願望を抱いていたからなのかは分からないが。

俺は気づけば、『闇に蕩かされる愛しい花束』の世界で女の子になっていた。

そう、TS転生って奴だ。

まさか女の子になるとは思ってもみなかった。

これじゃあヒロインとナニするとか以前に間男の餌食になる可能性が高い。

もしくは乱〇に参加させられるとか。

そんなの、イヤなんだが？

だからさっさと原作の舞台であるこの街から逃げ出したいのだが、しかし子供の一存で引越すなんて事は出来る筈もない。

それならせめて、原作から離れていよう。

そう思っていたのだが。

「よお、遊びに来てやったぜ！」

家の近くにある公園で、ベンチに腰かけていた『私』に大声で声を掛けてくる奴が走り寄って来る。

顔を上げると日焼けした肌の如何にもわんぱく坊主って感じの男の子がいた。

——彼の名前は、毒島黒男。

未来のヤリチン竿役間男である。

催眠シチュは本人がその事に気付いていないのが至高

毒島黒男。

現在12歳の少年だ。

今はわんぱく坊主って感じの見た目をしていて、イケメン。

その上成績優秀。

如何にもスポーツ得意ですって見た目してるのに学業も得意とかなにそれチートか？

チート野郎なんだよなあ。

そのハイスペックさに関しては原作で思う存分発揮されておりましたとも。

彼は別にその催眠能力と時間停止能力があったからセフレハーレムを築き上げられた訳ではないのだ。

しかし、とはいえ気になる事はある。

その催眠能力と時間停止能力は一体どこからやって来たのだろうか、とか。

いやまあ、原作では女の子をメロメロにする触手生物とかお前絶対ファンタジー産でしょって奴が登場したりするので、そういうのはやっぱり突っ込んだら負けな気もするけど。

せめて警戒はしておきたい。

どうやら今はまだそういうった能力に目覚めている様子はないけれども。

いたって普通の、ちよつとエッチなところがある12歳の少年だ。

「よ、よお雛木」

「別に、歩夢で良いっていつも言ってるじゃん」

「あ、歩夢……それじゃあ、いつも通りにさ。あつちで『挨拶』しようぜ？」

挨拶？

ああ、そう言えば、まだ私達挨拶してませんね。

面倒臭いですけど、だけど礼儀知らずにはなりたくありませんし。
はあ……

ベンチから立ち上がり、彼と共に公園の端にあるトイレ、その陰になつているところに移動する。

ここなら彼以外の視線はない。

うん、挨拶するにはもってこいだ。

「じゃ、挨拶するね」

そして私はいつも通りスカートを捲り上げて今日履いているパンツを彼に見せつけた。

「お、おお……！」

今日のパンツは私のお気に入りカラーのシトラスグリーンだ。

最近は気温が高くなつていたので涼しげな薄い生地パンツ。

……もしかしたら肌が透けたりしちやったり？

それは恥ずかしいな。

パンツ見せる過程で肌を晒すとか、まさに痴女じゃないか。

「触つて……いやいやなんでもないなんでもない！ も、もう挨拶終わり!!」

「はあ……？」

なに慌てているんだろ。

私はただ挨拶しただけなのに、変な奴。

将来はヤリチン間男だし、頭の構造が変なのかもしれない。

あるいはそうじゃないと催眠能力が目覚めないとか。

恐いな、催眠に掛けられないように精神能力とか鍛えておこう。

それで防げるかどうかかわからないのがまた怖いけど。

「じゃ、じゃあさ。喉乾いたから『水飲ませてよ』」

「……黒男、貴方面倒臭がり過ぎじゃない？」

「い、良いじゃんー」

彼に差し出されたペットボトルを渋々受け取った私は「はー」と溜息を吐きながらキャップを外し、それから中身を口に含んだ。

スポーツドリンクの少ししょっぱくて甘い味を感じながら口を窄め、黒男の顔、その唇に近づけていく。

まったく、二人きりの時は本人が望んだら口移しで飲み物を飲ませなくてはならないとか大変だ。

常識とは言え、やる方は大変なのだ。

いつその事、彼に直接飲んで貰った方が楽なだけけど、それは流石に非常識だろうし……

「や、やめっ！」

しかし、彼は何故か口が触れるよりも前に待ったを掛け、それから私の手からペットボトルを奪い取った。

「やつばなし！ 『なかつた事にする！ それに対して違和感を覚えない!!』」

……ぐくぐくと顔を真っ赤にしながら勝手にペットボトルのスポーツドリンクを飲む黒男。

相変わらず、挙動不審だ。

時々私の前でそんな風になるのだが、一体どういう事だろうか？

私は首を傾げつつ口の中のスポーツドリンクをこくりと飲む。

あれ、そういえば私、何でスポーツドリンクを口に入れてたんだっけ？

……ま、良いか。

「それじゃあ、挨拶も終わった事だし今日も遊ぼう、黒男」

「あ、ああ。今日もモンブレだよな」

「後もう少しで大型アップデートが来るし、それまでにブレイカーランクを上げないと」

「……いつも思うけどさ。折角外に出てるんだからスポーツとかするのは」

「私に死ねと？」

それこそ、私に催眠術を掛けない限りそんな事はしない。

まあ、今のところ催眠術に目覚めた形跡はないのでそんな事は不可能なんだろうけど。

「へへっ」

「何にやにやしてんのさ」

「いや、今日も歩夢。可愛いなって」

「それ、他の女の子にも言ってるでしょうが」
まったく、お調子者なんだから。

「歩夢は特別だよ」

それもまた他の女の子にも言っているでしょ。

私は「はー」と溜息を吐くのだった。

ああ、暑い。

もうすぐ季節は夏だ。

既に私は半袖ミニスカと防御力の薄い格好をするようになってい
る。

もう女の子になって12年なので、今更その事を男として恥ずかし
いとは思わない。

女としては、どうだろう。

いや、別にどうも思わないな。

黒男に見られている事も察しているが、それに関してもどうも思わ
ない。

そもそも異性として見ていないからだと思う。

多分パンツとか見せたり、あるいはキスをしたりする事になったら
拒否感を覚えたりするかもしれないけど。

だけどそんな事は絶対にしないだろうしなー。

将来的に彼がヤリチン間男に覚醒したとしても。

そうになったら、私以外のカワイイ女の子に目が行くようになるだろ
うし、そうになったらいよいよもって私も暇になるだろう。

ヤリチン間男の幼馴染として、そう言った未来に行き着くのは阻止
すべきかどうかに関しては、今のところ保留。

だって、現状ちよつとエロいだけのわんぱく坊主なのだし、私が出
る幕はないだろう。

何か、キツカケがあるのだろうか？

ともあれ、私は私が何よりカワイイ。

いざとなったら保身に走らせて貰うぜ。

それはそうと、喉が渴いた。

私は黒男の持っているスポーツドリンクを見、それから彼に「それ、

飲ませてよ」と言う。

「なっ、それ間接キスだろうが！」

「貴方、そんなこと気にしているの？」

「どうやら恥ずかしいらしい。」

「まったく子供だなー。」

「こんな様子じゃ、女の子にエロい事をするのはまだまだ先かもしれない。」

見えないところにロマンはあるし、見えたら見えたで眼福である

まず前提として毒島黒男と言う奴はエロい餓鬼なのである。
ませているとも言う。

12歳少年、まだまだ小学生だというのに無駄にエロい知識を持っている。

間違はなくどっかで仕入れているのだろうが、一体どこでだろう。まあ、現代はパソコンでいくらでも情報収集できるだろうし、そこから辺じやないかなと適当に考えている。

変なサイトに引っ掛かってウイルス侵入されてしまえ。

なまじ、本人のスペックが小学生離れしているので間違はなくコンピュータウイルスの侵入なんて許さないだろうけど。

嘘か真は分からないが、自分でパソコンを組み立てた事もあるぐらいの奴なのだ、毒島黒男と言う奴は。

そしてそんな毒島黒男のエロ具合に関してはクラスメイトの連中も当然知っている筈なのだが、しかし彼は何故かモテる。

ものすんごいモテる。

催眠術なんて使っていないのにモテる。

なんでやねんと思ったが、しかし本人はイケメンだし高スペックだし学校でメチャクチャ活躍しているしで、モテる要素しかないのだっ
た。

エロいというマイナス要素に関しても「そう言うところも素敵♡」
という意見を聞いた事がある。

元男の私には分からないが、しかし女の子って不良に憧れる節があるよね。

なんでだろう、どこに魅力を感じているのかまるで分からない。

とはいえ、そんな感じに毒島黒男はモテるのであった。

学校に行くときやーきやー言われ、女の子にラブレターを貰う事なんて日常茶飯事。

お前本当に竿役か？

だけど女の子に寄られると鼻を伸ばすしスキンシップされれば自分の方から逆にスキンシップに行く。

セクハラで訴えられるのではと一瞬思ったが、しかし相手は喜んでるしなー。

幸せならオツケーって事だろう。

モテる男って、ズルい。

そしてそんなイケメンモテ男の毒島だったが、一応男友達もいるっ
ちやあいる。

少ないけど、いる。

基本的に女の子からちやほやされる奴って男から嫌われそうだが、
しかしなんだかんだで黒男は暇さえあれば男連中と混ざって話して
たりする。

耳を澄ましてみると聞こえてくるのは「○○のおっぱいすげーよ
な」「揉みてー」……

やっぱエロ餓鬼じゃねえかお前等。

ませてんのは黒男だけじゃねえな、これ。

むしろ黒男に影響されているという可能性はある。

とはいえ、彼は現状不健全な事をしている気配はない。

それこそ「揉みてー揉みてーおっぱい揉みてー」とは言っているけ
ど実際に行動には移していない。

それを聞かされる身にもなってみるとは思うが、しかし行動に移ら
ないのならば問題ないと思っっている。

まあ、私の見ていないところで行っている可能性もあるにはあるけ
れど、そうならもう私の知った事ではない。

正直言ってしまうのならば、私は私自身が彼の毒牙に掛かって雌墮
ちする展開を恐れているだけであって、むしろ寝取られ展開に関して
は興味があったりするのだから。

NTRゲームの名は伊達ではない。

ハーレムを築き上げて酒池肉林しているのならば、それを遠くから
眺めていたいし。

薄情とは言ってくれるなよ、私は傍観者でいたいだけなんだ。

そう言う意味では、彼が未だに誰にも手を出していないというのは拍子抜けであり残念でもある。

まあ、小学生に何を期待しているんだお前って話か。

むしろ小学生が『そういう』事をやっていたら事案だ。

頭の中まっぴんクのエロ餓鬼はむしろ私だったって訳である。

と言う訳で、将来のヤリチン竿役間男である毒島黒男はエロい事を妄想しつつも健全な少年としての生活を送っている。

外で走り回るのも好きだが、現代人らしく家の中でゲームを遊ぶ方が好きな子供。

普通である、凄く。

これがどうなったら他人の女に手を出すような奴になるんだ？

私、気になります。

寝取られゲーの原作は主人公目線で語られる事が多いし、だから間男である黒男のバックストーリーはあまり語られなかった。

ただ、中学の時からいろんな女を食ってきたヤリチンという情報しか私は知らない。

……ん？

と言う事は、あいつあと数年っていうか1、2年でそうなるって事？

え、マジで？

全然ヤリチンとしての片鱗を見せないんだけど、これって大丈夫？

原作始まる？

ヒロイン達、このままだと普通に主人公とくつつかない？

それはそれで嫌だぞ？

雌堕ちはイヤだけど、寝取られ展開は普通になんなら私見たいんだけど。

最悪な事を考えている自覚はあるし、どちらかというところ言う方にさせない方が人情があるのだとは思っている。

だけど私の本質はやはり、NTRゲーナーなのだ。

ヒロイン達が主人公の裏でエロい目に遭っている姿を見たい。

ヒロイン達が快樂の為に他の友人を売る姿を見たい。
ヒロイン達が主人公に嘘を吐くところを見たい。

ヒロイン達が——白目を剥いて果てる姿を、見たい。

うーん、やはり私の方が性格的にはアレなんじゃないかって思えてきた。

現状黒男はエロい餓鬼でしかないの、悲しいかな、多分それはあっている。

なんてこつたい。

「歩夢、どうかしたん？」

と、考え事に耽っていた私に対し黒男が尋ねてくる。

現在、私達は帰宅の途中だった。

やはり夏の時期に外でゲームをするというのはいろいろと問題があったので、続きは私の家と言う事になったのである。

やっぱり夏の日差しと気温でゲーム機がぼつかぼかになるのは怖い。

熱中症も恐いし、やはりクーラーをガンガン効かせながら氷たつぷりのグラスに注ぎこんだコーラ片手にゲームをする事こそ至高。

やっぱり分かんだね。

「ていうか黒男、貴方。ゲーム下手だね」

「いや、これに関しては絶対違う。歩夢が上手すぎなんだって」

「そんなんだと貴方が他人に「はちみつください」とか言って迷惑掛ける未来が見える」

「どういう未来を想定してんだてめえは……」

「絶対裏切り！」

「歩夢って時々恐いよ……」

失礼な、私はお前のマジカルチ○ポの方が怖い。

……今も凶悪な形をしているのだろうか。

ちよつと興味ある。

もしかしたらまだ皮を被っている可能性もあるし、逆の可能性もある。

うーん、まさしくシュレディンガーのチ○ポだ。

何考えてんだ、私は馬鹿なのか？

そうこうしている内に私達は家へと到着。

生憎と父親と母親は仕事でいないらしい。

というか二人に関してはむしろ家にいる方が珍しい。

共働きの家庭だと、子供は独りぼっちで家にいる事が多くなると思う。

その点、私には黒男がいるので退屈しない。

まあ、現代は通信プレイがあるので別に黒男が家にいなくても普通に遊べるっちゃあ遊べるんだが。

しかし、暑かった。

気づけば私は汗びっしりで服の着替えが必要なほどだった。

それは黒男も同じだったが、しかし男の子なんだし我慢出来るでしよ。

「あー、その。歩夢？」

「ん？」

と、そこで黒男が提案してくる。

「汗びっしりだしき。『一緒に風呂で水浴びしないか？』」

「んー」

それに関しては別に良いけど。

「黒男、貴方着替えあるの？」

「そ、それはその。お、置いてたらすぐに乾くって！」

「……ま、夏だしね——それじゃあ、ん」

「ん？」

「服、脱いでよ。乾かしておくから」

目を丸くする黒男。

「……なんで躊躇するんだ？」

一緒に風呂入るんだし、どうせ裸になるんだからさっさと脱いでよ。

「わ、分かった……」

結構な時間躊躇したのち、彼はゆっくりと服を脱ぐ。

と言ってもやはり男の子。

着替えは頭突っ込んで「ハイ終わり」ってタイプなので、その逆も速攻で終わった。

「……」

すっぽんぽんの黒男。

股間は何故か手で隠しているが、私はちゃんと見ていた。

ビッグエレファントだった。

皮なんてなかった。

ていうか何故か少し膨らんで上を向いていらっしやったね。

あれでまだまだ大きくなる余地があるというのだから驚きだ。

こう、えげつない形をしたし、既に女泣かせの片鱗を見せてくれた。

「じゃ、ちよつとこれ干してくるから。先に風呂入っててよ」

「お、おう……」

……

がらがら。

「ん？ 何やってんの貴方」

服を脱いで風呂に入ると、何故か黒男は突っ立っていた。

え、なにしてんのこいつ？

「べ、『別に良いだろ』！」

……確かに、どうでも良いか。

「じゃ、私シャワー浴びたいんだけど」

「あ、つと。じゃあ俺、浴槽の方にいるわ」

そう言いつつも彼は私の身体をジロジロ見ている。

私の身体、どこか変、かな。

一応怪我とかしてないし綺麗だと思うけど。

おっぱいも学校で一番膨らんでいるし、恥ずかしいけど女的にはちよつと自慢にしている。

「……おっぱい見ても良いけど、揉みたいとかは言わないでよね？」

「んなつ！ な、なな……ッ！」

「まったく、そんなえつちな事考えてたの？ ——一応言っておくけ

ど、そういう事は普通、女の子は嫌うんだからね?」

「わ、分かってるって」

「じゃ、私シャワー浴びるから」

と、そう断ってから私はシャワーヘッドを持ってそれから蛇口を捻る。

しゃー、と少しだけ温かい水が噴き出て私を濡らしていく。

汗を流すためにゆっくりとした手つきで身体を撫で上げる。

ごしごしと擦りたい気持ちもあったが、それやると肌が傷つきそうで、怖い。

女の子の肌って敏感だし、大事にしていきたい。

だから本格的に身体を洗う時も普通の女の子みたいにスポンジを使って洗っているし。

そしてあらかた身体を清めた後、私は黒男に言う。

「じゃ、はい。シャワー」

「お、おお!」

「背中とか洗えるよね」

「子供扱いすんじゃないねえ!」

顔を真っ赤にして怒る彼を見て、なんだかんだでこいつも子供だなーと思った。

「別に一緒に入ってるんだから、背中を洗う事くらい別に良いじゃん。むしろ、しっかり洗わない方が汚いと思うんだけど」

「え、は? え、そうか?」

何故か黒男は混乱しているみたいだ。

一体どうしてだ。

私は割と一般論を述べているつもりなのだけれども。

しかしこのままこいつに付き合っても時間の無駄な気がしたので、「あーもう」と私は強引に彼を椅子に座らせ、それからシャワーから出るお湯をぶっ掛けた。

「のわっ、わー!」

黒男を濡れネズミにし終えた私は、まあ、こいつ男だし良いだろうと思いつながら手でボディソープを泡立て、それで彼の背中を洗ってい

く。

「ごしごし、ごしごし。」

ただ、そこで少し問題が発生。

ちよつとボディソープを取り過ぎた。

泡が多過ぎる。

このまま流すのも勿体ないし、良し。

「えへ、……う。」

黒男の前も洗う事にした。

前に回るのも面倒なので、手を回して洗っていく。

「ごしごし、ごしごし。」

胸から下へと向かっていき、そして股間へと。

……ここは敏感なところだからなー、元男だから知ってる。

壊れやすいガラス細工を触るような、そんな慎重な手つきでにゅつと握り、優しくしゅつと洗ってやる。

途中、でっぱりに引っ掛かってしまったが、もしかして痛かっただろうか？

「ねえ、黒男？」

「う、ぐ……『自分で洗う』!!!」

え？

そ、そんなに叫ばなくても、それなら別に良いんだけど。

「ぎ、『先に出てて』!!!」

お、おお。

分かった……？

首を傾げながら私はひとまずシャワーで付いてしまった泡を洗い落とし、持ってきていたタオルで軽く拭いてから風呂場から出る。

風呂場の外に置いてあったバスタオルで身体をしっかりふき取り、服を着てから改めて振り返る。

……シャワーの音が聞こえてこないんだけど、何してるんだろあいつ。

「う、ああっ！」

？

なんかびちやって音がしたけど、何の音だこれ？

良く分からんけど、まあ、いつか。

とりあえず楽しくゲームを出来るように部屋のクーラーをつけておいて、後は黒男の着替えを用意しておこう。

干していた時点で気づいていたけど、服がそんなすぐに早く乾く筈もない。

だからまあ、やっぱり変えの服は私が用意しなくてはならない。

そして、幸い私達はまだ12歳で肉体の差があまりない。

つまり私の服をあいつは着られるって事だ。

……まあ、お約束ならばここで女ものの服を置いてあいつに女装させるものなのかもしれないけど、しかしそれって誰得なのかって話なので、普通にジャージにしておく事にする。

学校のジャージは男女共通だし、あいつも着れるでしょ。

それじゃあ、私は部屋で待っていようかな。

——それからしばらくした後。

いや、結構待つ事になったな。

なにしてたんだこいつ、風呂場を洗ってたりしたのか？

「……なんか、歩夢の匂いがする」

「いや、私の服なんだからそうでしょ」

「……」

なんか鼻血を出す黒男の姿があった。

いや、何でだよ。

小学生を無礼るなよ？

実際のところ、毒島黒男は一体いつごろから自分に催眠術なんて力が宿ったのかを知らなかった。

ただ、自覚した日の事は鮮明に覚えている。
とは言っても特別な事は起きていない。

いつも「野菜を残さず食べなさい！」と口煩い母親に対して「イヤだ！」と反抗したところ、あつさりと「分かったわ」と引き下がられ、それどころかすべての野菜を食べて貰えた。

それが最初の疑惑。

あの頑固者で面倒臭い母親があつさりと自分の言う事を聞くなんて、あり得ない。

だから試しに「学校を休みたい」と仮病をしたいと堂々と告げてみたところ、なんと母親はあつさりと「学校に連絡するわ」と言うのだった。

間違いない。

どうやら自分は他人に言う事を聞かせられる力があるのだ！

……それが催眠術と呼ばれる力である事を知ったのは、彼がパソコンを使って『エロ同人誌』を読んだ時だった。

最初の頃、彼はその能力を我儘に使っていた。

食べたい料理を作らせて、勉強をサボる。

食べたい料理が食べられないなんて苦痛だったし、勉強なんて授業を受ければすべて理解出来るのにやる必要性が分からなかった。

催眠術を使って、彼は悠悠々自適な生活を手に入れたのだ。

幸い、彼にもそこそこの自制心はあった。

だから例えば「欲しいものがあるから買って欲しい」という願いは口にしなかった。

まあ、これに関して言うのならば、「家のお金を自分の好き勝手にしたらいろいろ終わる」事を彼は小学生ながら理解していたからだっ

た。
そう、彼は小学生でありながら賢かった。

だから、他人を好き勝手に出来るという意味もすぐに理解した。最初に催眠術を使って操ったのは、同じクラスメイトの○○。学校の影に呼び出し、パンツを見せて貰った。

その時のドキドキを今では忘れてしまったが、凄く興奮した事だけは覚えている。

その後も彼は女の子を操ってはパンツを見せて貰った。

……その頃はまだ性知識というものが皆無だったのでそれくらいしか使い道が思いつかなかった。

そして、彼がエロい知識をパソコンで入手した頃とほぼ同時期だった。

彼が、雛木歩夢という女の子と出会ったのは。

可愛らしい女の子だった。

少し色の抜けた肩に掛かるほどの長さの黒髪、澄んだ茶色の瞳はくりっとしていた。

肌は透き通るように白く、そして何より彼女は今まで会ったどんな女の子よりも大人びていた。

それは一言でいうのならば、一目惚れだった。

だからこそ彼がすぐに自身の催眠術を使い彼女を思いのままにしようと思いついたのは当然の道理とも言えた。

当然の帰結とも言えるが、催眠術によってすべての人間を意のままに操れる彼には、もはやブレーキというものが存在していなかった。

行動の指針は「自身にとって利があるか否か」だ。

そして彼女を自分のものにするという事はどうしようもないほどに利がある事、その筈だった。

だがしかし、彼は催眠術を用いるよりも前に知ってしまった。

「ん？ 黒男、何見てんの？」

無意識のエロというものを。

……具体的に言うとうと、身体を前に倒した時にちらっと服の間から見えるおっぱいの膨らみとか。

特に歩夢という女の子は何故かいろいろと防御力が低く、黒男の欲情を刺激しまくった。

その結果、どうなったか。

(やべえ、エロ過ぎんだろ……！)

エロに対する躊躇であった。

ここに来て初めて彼はブレーキというものを手に入れたのである。というか、催眠術でエロい事をする前に歩夢が接近してきて黒男の情緒をぐっちゃぐちゃにしてくるので、それより先に進もうとすることじゃなくなると言うべきか。

挨拶としてパンツを見せて貰ったりとか、その程度ならば辛うじて出来る。

だが、それより先は「やべえ」と思っただけで立ち止まってしまおう。

そしてその間に歩夢が肉薄してきて、黒男の事をノックアウトさせてくる。

それが二人にとっての、というか黒男の日常だった。

……今日も今日とて黒男は悶々としながら歩夢の近くにいる。

風呂場に入って裸を見てやろうと思ったが、まさかその先に踏み込んでくるとは思いもしなかった。

で、その結果がこの様である。

お風呂場でソロプレイしてすつきりした後、「俺何やってんだあ」と罪悪感に苛まれながら風呂場を掃除。

出て見たらなんか、見慣れた学校のジャージ。

それを着たらなんか歩夢の匂いがするんだけど？

「いや、私の服なんだからそうでしょ」

マジでこいつ本気で言ってるの？

黒男は空を仰ぎ見たい気持ちでいっぱいになった。

鼻血が出て来たので猶更である。

ともあれ鼻にティッシュペーパーをぶっ刺した黒男。

それから公園でやっていた『モンスター・ブレイカー ライン』を再開する。

ちなみに後一か月で大型有料アップデートがあるので、その為に二

人ともゲームを進めている最中といった感じだった。

「ふ、ふん。ふむ」

ベッドに転がりながらゲーム機を操作する歩夢。

そんな彼女は今、ぶかぶかのシャツ一枚とかいうお前正気かと突っ込みたくなる格好をしていた。

それで足をバタバタさせているのだから頭おかしい。

動かすたびに健康的な太ももが視界にチラつく。

ていうかパンツが丸見えになっている。

本人曰くお気に入りのシトラスグリーンのパンツが。

「……」

もし。

もし、今自分が彼女に覆い被さったらどうなるのだろうか？

そんな想像をしてしまう。

きっとそうしたら歩夢は驚いて——それから、どんな反応をするのだろうか。

歩夢は黒男にとって常に予想外の斜め上な行動をして来る。

だからその反応を予想する事は難しい。

「嫌い」

そう一言で言われたら首を吊る自信がある。

催眠術で何とかなるとか、そう言う問題ではない。

凹むとかそう言った次元でもないし、普通に死を選ぶ。

「ん、どしたの黒男？」

ふと、そう尋ねてくる歩夢に黒男は「なんでもねーよ」と答える。

……既に催眠術を使って歩夢を自分のものにしてしまおうとか、そういう事を黒男は考えないようになっていた。

それが成長なのか否かは、今のところ分からなかった。

唯一間違いないのは——

「んふー、宝玉げつとお♪」

「おまつー！ 抱き着いてくんなや!？」

これからも、黒男は歩夢に翻弄され続けられる事だろう。

スク水は年相応でも良いし多少きつくても良い

夏本番。

と言う訳で、プールに行けと家を追い出された私は渋々黒男と一緒に近所にある市民プールに出掛ける事にしたのだった。

唯一の救いと言えば、その市民プールは温水の室内プールである事だろう。

ゴミ処理施設と一緒になっていて、その燃えるゴミを燃やした熱で水を温めているのだそうだ。

ちなみにスパ施設もあったりする。

プールは別に嫌いではない。

ただ好きではないだけだ。

というか運動が全般的に苦手である。

より正確に言うとゲームが好き。

一生涯に引き籠ってゲームばかりしていたい。

だから今日も荷物の中にこっそりゲーム機を忍ばせているし、適当なところで切り上げてゲームで遊ぶつもりだ。

「いやお前、『プールにはちゃんと言われた通り行こうな』？」

しかし黒男と一緒にプールに行くなんて久しぶりだ。

まあ、プールに行く機会は夏くらいなので一年周期でやって来るものなのだけど。

気分的には10年も一緒に行っていないような気がする。

プールに行つて泳ぐ事自体アウエーだからなのかもしれない。

イヤな事つて忘れたくなるからね。

あー、早くゲームやりたい……

「いや、歩夢がプール苦手なのは分かってたけど。泳ぐの苦手だったっけ」

「別に？ 下手の横好きの反対だよ、私は。何ならバタフライも泳げるし、古流泳法だつて行ける」

「古流泳法つてなんだ……？」

一体いつどこで誰から学んだんだという黒男の問いに対しては「マ

「ニューアルを読んだのよ」と適当に答えておく。

実際は動画サイトで見ただけである。

さて、そうこうしている内に私達は市民プールへと到着。

暑さを避ける為に朝早い段階から家を出ていた筈なのだが、既に結構ムシムシしている。

これ、帰り道が大変になりそうだ。

一応お母さんからは仕事に行く前に「これで黒男君とご飯食べてきても良いから」とお金を貰っているの、昼ご飯をここで食べてゆっくりしていくって手もある。

貰った金額はプールの入場料と1500円、なので一応近くにあるハンバーガーショップで高めのセットメニューを二人で頼む事は可能だった。

私的にもせっせかせかせかするのはイヤだし、お母さんの善意に甘えて今日はゆっくりしようかな？

「んじゃ、また」

「お、おう……」

と言う訳で、私達は入場料を支払い、それからお互い更衣室へと入る。

そしてさっさと水着に着替えた私はプールへと向かって彼がやって来るのを待っていたのだが、しかしオカシイ。

あれ、何であいつ遅いの？

こういうのって普通、用意するものが少ないっていうか脱いで履くだけの男の方が早いもんじゃないの？

不思議に思っただけの方を見に行ったが、しかし彼の姿はない。戻ってみても彼はいなかった。

……あれ？

そうして首を傾げていたら、彼がやって来る。

学校指定の水着ではなく迷彩柄のボクサーパンツみたいな奴だ。

そして彼は私の姿を見、なんか驚いたようながっかりしたような表情をする。

「いや、お前なんでスク水なの？」

「え、いや。機動力良さそうだし」

「そう言う事を言っているんじゃないやねえ……」

言いたい事は分かる。

プライベートで来てるのに学校の奴を着ているのは如何なものかかって事だろう。

だけど、毎年毎年水着を買い替えるのも面倒だし、お金の無駄なのだ。

その点学校指定のスク水は安く買えるし、特に授業で使う必需品だ。

それをここで利用するのはとても利に適っていると思うのだけだと、そこで何やら黒男の視線が若干下に向いている事に気付く。

ああ、こいつまた……

「し、『視線は気にするな』」

それじゃあ、早速プールで泳ぐ？

といってもここ、一応本格的なプールと流れるプールに別れていて、泳ぐ場合はぶかぶか浮かんで流されるかガチで泳ぐかの二択を選択しなくてはならない。

「その前に、さ。その……」

「ん？」

黒男はちらつとプールの方へと視線を向ける。

時間が早いからか、まだ他の利用者はいなかった。

「そ、その。お、『歩夢のおっぱいってサイズどれくらいなんだ？』」

「え？ ……Hカップだけど？」

「え、えっちい？」

で、デカすぎんだろと呟く彼に私は「いやー」と続ける。

「最近というか今年に入って急激に大きくなりだしてね。正直ちよつと痛いし、だから多分まだ大きくなるね」

「まだ大きくなる!？」

うっそだろおい。

呆然と呟くが、残念かな現実である。

大きいとただ使えるブラが減るだけなのであまり良い事がない。

もうちよい、小さくても良い気がする。

「んじゃ、泳ごつか。じゃあ、どっちで泳ぐ？」

「……流れるプールで。そっちの方が歩夢、楽だろ？」

「楽とは」

「も、もとい。あんまり泳ぐ事に対して消極的なら、そっちでぼーっと時間潰す方が良いんじゃないか？」

一理ある。

そう思った私は頷き、それからスイミングキャップを装着して彼の手を握る。

「じゃ、行こう？」

「お、おお……！」

「なんか身体が固くない？ 準備体操する？」

「時々俺はお前の事をぶん殴ってやりたくなる時があるよ……」

言っている意味が分からなかったが、とりあえず私達は準備体操をし、それからプールへと向かった。

運命との出会い

「あは、えいっ!」

「ちよつ、てめえいきなり何しやがる!」

「あははっ、悔しかつたら捕まえてみろっつてんだよお!」

「待ちやが——っつてなんで水の中でそんなに早いんだお前!」

「はっはっは! あのさー、黒男!」

「なんだよっ!」

「帰らない?」

「……いきなりテンション駄々下がるのやめろ、びっくりするだろうが」

近くまで寄ってきた黒男がジト目で見てくるけど、だって仕方がないじゃないか。

元々運動、苦手なんだ。

出来れば一生涯のうちにゲームやってたい。

つまるところ、やりたい事が出来ないからテンションが駄々下がっているっただけとも言おう。

「飽きた」

「飽きるの早過ぎだろ、まだ流れるプール一周もしてないぞ?」

「ぶかぶか浮いて流されるままとか何が楽しいの?」

「……じゃあ、あっちの普通のプールに行くか?」

「あっちはあっちでただ同じ場所を行ったり来たりするだけで虚しい気持ちにならないかな」

「我儘言うなや」

「まさか黒男に我儘言うなって言葉を言われるとは思ってもみなかったよ」

「お前は俺をどんな人間だと思っつてんだこら」

「それはともかく」

「おい」

私はちよつど近くまでやってきていた坂を上り、プールサイドの上へと移動する。

一緒についてきた黒男に「こうしない？」と提案する事にした。

「黒男はとりあえずここで泳いでいるとしよう」

「なんかロクな事考えてないような気がするが、続けろよ」

「私は上にある休憩エリアでその姿を見ているとしよう」

「いやお前、絶対ゲームするから俺の泳いでいるところ見ないじゃん」

「私を信じてっ！」

「日頃の行いが悪い」

「ばっさりだった。」

「なんてこつたい。」

「ていうか別に泳いだとしても泳がなかったとしても、その真偽をお母さんは分からないんだよな」

「残念ながらそこら辺は正直に伝えてくれとお願いされてる」

「私とお母さん、どっちが大切なのっ！」

「……いや、それはともかく」

「何故ちよつと言いだんだ？」

「それはともかく！」

黒男はむきになったように顔を赤くしながら言う。

「まだ時間、9時半をちよつと過ぎたばかりだぞ。一体どれだけゲームで時間を潰すつもりなんだよ。バッテリー持つのか？」

「む」

実を言うとバッテリーの交換時期が近づいているこのゲーム機、満タンまでチャージしても一日持たない。

ていうか経験則的に半日も持たないと思う。

そういう事が分かっているならさっさと交換しろよって話なのだが、面倒臭がりを発揮してしまって今までそのままになっていた。

まさかそのつけが今になってやって来るなんて。

「だけど、プールで時間を潰すのにも限度がない？」

「それはほら、途中でサウナに入るとか」

「避暑の為にやって来たのに暑いところに率先して入る理由がない気がするけど——うーん」

どうしたものか。

なんとかして黒男を説得してこのプールから脱したい。

だけどこの感じだと上手く丸め込めそうになさそうだし——ん？
ころころ、ころころ。

そこでプールサイドの上を浮き輪が転がって来て、ちょうど私の足元で止まる。

拾い上げて転がってきた方向を見ると、私達よりも年上の女の子がこちらにやって来るのが見えた。

ぱつと見、中学生くらいだろうか。

茶髪の髪をサイドポニーにしているその女の子はこちらにやって来るなり、「すみません」と頭を下げてくる。

「浮き輪、拾ってくれてありがとうございます」

「いえいえ」

別に転がって来たものを拾い上げただけだし。

私はそれを彼女に返却すると、そこで一組の男女がやってきた。

いや、この場合は追いついたと言うべきか？

雰囲気的に中学生の女の子と知り合いらしいその二人。

一人は小さな女の子だ。

多分私達よりも年下で、とても可愛らしい外見をしている。

隣の男の子の腕を掴んでいるが、もしかして兄妹だろうか？

そして、そのままに腕を掴まれている男の子を見、私は衝撃を受けた。

それは直感であり、何より確信だった。

私は、この男の子を知っている。

今まで見た事がない、それこそ前世の時から見た覚えはない筈なのに。

そしてその男の子が何者かを察した時点で、この三人がどのような人物であるのかを私は理解したのだった。

この男の子は、この世界の主人公だ。

名前は——分からない。

『闇に蕩かされる愛しい花束』の主人公の名前はプレイヤーが入力し

て決められたからである。

「つと……貴方、名前を聞いても良いかな」

「え、俺？」

いきなり名前を聞かれた彼はきよとんとした顔をする。

しかし彼はその分からない状態のまま自己紹介をしてくれる。

「平井直人、だけど」

「ひらいなおと……」

私はその名前を復唱する。

なるほど、平井直人——覚えてぞ。

彼が、主人公か。

そしてこの二人の美少女こそ、黒男に寝取られるヒロイン。

小鳥遊沙耶、そして高原璃々。

姉弟のように仲が良さげな三人だったが、彼等の関係は幼馴染。

その関係を、将来黒男はその竿で壊す事となる。

しかしそれはあくまでゲームの話であり、ここは既に現実の世界だ。

一体三人はどのような人間なのだろう。

興味が尽きない。

「あの、もしよろしければ——」

「帰るぞ、歩夢」

——と。

何故かあからさまに不機嫌そうな黒男が言う。

そして私の返答を待たずにぐいつと私の腕を掴み、出口に向かって引っ張っていく。

「ちよ、ちよつと……？」

私は驚き尋ねるが、しかし彼は答ええない。

結局男女の更衣室が別れる場所まで強引に引っ張られ、そこになつてようやく解放された私は改めて彼に尋ねる。

「どうしたの？」

「……いや、何でもない」

「いや、でも」

「何でもないって言ってるだろ！」

すつと視線を逸らし、ぶつきらぼうに答えた彼はそう一方的に答え、それから一人で更衣室へと向かってしまう。

残された私は訳が分からず首を傾げるほかなかった。

「……………」

小学生なりの願望

入った時と違って黒男は既に着替えを終えて外に出ていた。相変わらずむすつとした表情をしていて、腕を組みながら壁に寄りかかっている。

とはいえ小学生だからその姿は可愛らしい……と思うのは失礼だろうか。

黒男は黒男なりに何か思う事があったのだろう。

それが何なのかは分からないけど、ただどこそのままと言う訳にはいかない。

「その、黒男……？」

私がやってきた事に気が付いた黒男は視線だけをこちらに向けて、それから少し気まずそうに「……おう」と返事を返してくる。

どうやら私に対して何か腹を立てている訳ではないらしい。

その事に少しだけホッとする。

「帰る？」

そして私の短い問いに対して彼は少し逡巡したあと、「ちよつと、来いよ」と歩き始めた。

どうやら場所を変えたいらしい。

「そういう事なら」と私は彼の背中を追いかける。

……決して隣を歩こうとはしない。

なんて言うか私も気まずかったし、それに彼も今はそれをしては欲しくないだろうと思っただから。

そうして私達は無言のまま市民プール内を移動し、それから外へと出た。

もしかして、帰るのだろうか？

しかし黒男は駐輪場がある方向とは真逆の方へと歩き始める。

この方向にあるのは——公園だ。

そして私の予想通り黒男は公園へと足を踏み入れて、それから木陰の下にあるベンチに腰を下ろす。

私はその隣に腰を下ろすが、しかし黒男はそこですつと距離を取っ

て来る。

微妙に傷ついたが、まあ、そういう気分なのだろう。

「……」

「……」

しばしの沈黙。

私は黒男の言葉を待つ。

……多分、時間にしては五分にも満たなかっただろうが、それでもその静寂は永遠に感じられた。

「……あいつ」

そしてようやくと黒男が口を開いたと思ったら、尋ねて来た事と言えは、

「平井直人って奴」

「あー、うん。さつき会った子ね」

もしかして、将来寝取る事になる相手として何か運命的なものを感じた、とか？

「歩夢、どう思ったよ」

「え、私？」

どういった意図の質問だろう、良く分からない。

私の意見を聞きたいのだろうか？

「えーっと、普通に好少年だと思ったけど」

「そうじゃなくてさー！」

一瞬衝動的に叫びかけ、それから黒男は遠慮がちに「カツコ良かったとか、思ったん？」と尋ねてくる。

え、カツコ良かった？

んー、まあ。

「社会的にはカツコ良い部類には入ると思うよ」

「……なんて言うか、歩夢は」

口ごもる黒男。

何か、言い辛い事を言おうとしているらしい。

「何て言うか、その。あれだ」

「あれ？」

「……良い言葉が見つからない」

「ふーむ、少し待ってようか？」

私は黒男の答えを待たずにベンチから立ち上がり、それから近くに
あった自動販売機の元へと歩いていく。

500円投入し、スポーツドリンクを二本購入する。

それを持って帰り、彼に手渡しすると、どうやらその時点で言葉が
見つかったらしい黒男が口を開く。

「歩夢ってあまり男に興味ないって思ってた」

「んー、まあ。それは」

確かにそうかもしれない。

頷いて肯定する。

そしてここでその話をするという事は、つまりそういう事なのかも
しれない。

「平井直人君に私が興味を示してた事が、意外だった？」

「……」

「そかそか」

つまり、いつもと違う様子を見せた事に対して不安を感じたって事
かな。

確かに、あんな風に初対面の男に対して名前を聞くのは、普段の私
らしからぬ行動だったかもしれない。

「だけど、……いや。確かにこれは、黒男に対しては失礼だったかな。
貴方を置いて話をしようとしちゃってた訳だけど」

「そう言う訳じゃ——」

少し黙った後、「——そうかも」と項垂れる黒男。

「ま、確かにね。今日は黒男と一緒に遊ぶ筈だったのに私、我儘言っ
てばかりだったもんね……もしかして、イヤだった？」

「いつもの事だから、慣れてるよ」

「じゃあ、さ」

私は一つ、彼に提案してみる事にする。

「今日のお詫びにさ。黒男の好きな事、私、可能な限り応えてあげるよ
？」

その言葉に対し、黒男はびくりと身体を震わせる。
何かを怯えているようだ。

……怯える要素、あるか？
もしかして、良からぬ事考えてる？

「申し訳ないけど、えつちな事は駄目だかね。あくまで健全なもの
オンリーだから」

その言葉を聞いたかどうかは分からないが。

黒男は少ししたあと「じゃあ」と口にし。

それからまた口を開いたり閉じたりしたあと。

ようやくと、その事を私に言ってくる。

「この夏、小学生最後の夏。一杯一緒に二人きりで遊びたい」

「んー？」

「だ、ダメか？」

「いんや」

なんていうか、その。

年相応の子供らしい願いだなって思った。

エロ餓鬼だし、てつきりおっぱい揉みたいとか言ってくるかと思っ
た。

……別にそのくらいなら許しても良い気もしていたけど。

「でも、出来るなら私は家の中で遊びたいな。ゲームしたい」

「……なんつーか、歩夢は変わらないよな」

そう言って笑う黒男の表情はいつも通りだった。

馬鹿っぽくて餓鬼っぽい、そんな何も考えていなさそうな笑顔。

「歩夢と幼馴染で良かった」

「そう？」

「おう、毎日飽きないからな」

「それなら良かった」

私は笑い、黒男も笑う。

それからスポーツドリンクを一緒に飲み、一緒に「あちー」と口に
する。

夏の日、夏の昼。

なんだかんだで、今日は黒男と一緒に来て良かったなと思った。

ある意味ズルする事も醍醐味

さて。

誘蛾灯に集まる虫達の如く、あるいは美女をナンパしてくる頭お猿さんな男達の如く、夏休みの子供に必ずと言ってもしっかり纏ってくる面倒臭い存在がある。

ていうか夏休みの宿題である。

小学生の宿題なんてそんなの簡単じゃんかと思われがちだが、しかし大人が子供達に勉強する事を休みの間でも習慣付けさせるために与えるものなので、長期的に行わなければならないものが多い。

山ほどある問題集、毎日書かなくてはならない日記、そして自由研究。

ただ、どれ等も本気を出して取り掛かれば数日で終わるものでもある。

そしてその事実こそが夏休みの子供達を狂わせるのだ。

『頑張ればすぐに終わる』『まだまだ大丈夫』『もうちょっと遊びたい』『ていうかやりたくない』

そんな気持ちで夏休みの宿題を後回しにする。

そして結局最終日まで残す事になり、泣きを見る事になるのが定番である。

あるいはもう「あ、ダメだこりゃ」と諦めて手を付けない子もいるかもしれない。

なににせよ、夏休みの宿題と言うのは子供達にとって厄介な存在なのは間違いない。

とはいえ我々も既に小学6年生、私はそれ以上に転生者だ。

今更後回しにして後悔するような事はしない。

そして7月中に終わらせるべく、私達は一丸となって夏休みの宿題を攻略する為、私の家に集まるのだった。

「……」

「……」

「……」

無言で問題集を解いていく。

時々氷がたつぷり入ったコーラをストローで啜る。

攻略を開始してから、既に2時間が経過していた。

現状、私は8割、黒男は6割終わったって感じだった。

実際のところ問題集の問題は決して難しくはないのだが、如何せん量が多い。

そしてそこから自分で正誤確認をし、間違ったところは解き直さなくてはならない。

ぶっちゃけ、面倒臭い。

小学生の問題なんだから間違える筈がないと思われるだろうが、案外ケアレスマスというものはあるものなのだ。

具体的に言うと20問に1回はある。

「……」

しかし、どうも黒男の様子がおかしい。

いや、問題は解いているのは間違いないのだが、落ち着きがない。

なにやらチラチラこちらを見てきているような気がする。

んー、なんでだ？

どちらにせよ、集中していない事には変わりない。

しかし私は後もう少しで終わるので気を緩めても良いが、彼はまだ問題集が残っている。

なのでここで話しかけたりは出来ないだろう。

「……なあ、歩夢」

と、思っていたらむしろ黒男の方から話しかけてきた。

「ちよつと、暑くね？」

「我慢してくれー」

どうして暑いのかと言うと、現在我が家では省エネ運動が行われており、その為若干エアコンの設定温度が高いのだ。

具体的に言うと29度。

暑過ぎる事はないけれども、いや、やっぱり熱気は感じるわ。

「どうするっ？ お母さんに頼んで下げて貰う？」

私はグラスを手を持って揺らす。

カラン、と氷がぶつかって音を鳴らした。

夏らしい涼しげな音を感じて何となく体温が下がった気がしたが、実際ただの気のせいである。

熱中症には気を付けなければならぬけど、だけど、29度で熱中症になるかどうかは正直分からない。

我慢出来る暑さと我慢出来ない暑さ、その中間である。

気持ち的にはもっとガンガン効かせた上で布団に包まって過ごしたいというのが本音だったけど、それは絶対に出来ないしね。

だから仕方がないので無地の白いノースリーブシャツを着てショートパンツスタイルという涼しい格好をしているのだが、それでもやっぱり暑い。

自然とだらだら汗が出てくる。

定期的に首に掛けたタオルで拭ってはいるが、気持ち悪い事には変わらない。

「さ、先に掛けておいて良かった……」

「んー？」

「な、なんでもねー」

何かぼそつと呟いた気がしたが、生憎と聞き取れなかった。

そして変わらずチラチラとこちらを見ってくる。

？

どうしたんだろ、ホントに。

私の顔に何か付いてる？

汗が付いてるか。

「な、なあ歩夢？」

「なあに？」

「歩夢ってやっぱり緑色が好きなのか？」

「……いきなり唐突だね。いやん、緑は好きだよ？ 色の中では一番好きかもしれない」

私の私物は確かに緑色のものが多い。

シャープペンシルなどといった文房具から始め、衣服なども緑色のものが多い。

だけどこの質問に何の意味が？

「あ、もしかして私の誕生日プレゼントの事、考えてくれてる？ 9月だし、後もう少しだもんね」

「そ、うだなー」

「ゲームソフトが欲しいな、私」

「そっかー」

「む、ん？ なんかちよつと上の空じゃない？」

「な、なにがあ？」

私の問いに対し、黒男は挙動不審になる。

それがいけなかった。

机に彼の肘がぶつかり、ガラステーブルが前に出てくる。

私視線で言うのなら、こちらに突き出てきた。

ぶつかり、ぐらりと身体が揺れる。

そして私は今、コーラの入ったグラスを持っていて、だから当然中に入っていたコーラの水面もちやぶんと揺れて、跳ねた。

びしゃっ。

とはいえ、何とかなかった。

私の身体があったから床には零れなかったし、そして問題集がびしょ濡れになるという最悪な事態も起きなかった。

ただ、コーラは半分ほどなくなってしまった。

ちよつと、勿体ない事をしてしまったな。

「ま、不幸中の幸いかな——って、どしたの黒男？」

なんか顔を真っ赤にしている黒男。

え、どうしたの？

私の事を見てるけど、別に何も起きてないよね？

「あ、歩夢？」

「なんかさつきから黒男、変だよ？」

「ま、また『一緒に水浴びしないか』？」

「……良いけどまた唐突だね。なんでさ？」

「とりあえず着替えを持って一緒に行こうか！」

「…………？」

首を傾げつつ私は着替えとタオルを持って風呂場へと向かう。

そして服を脱いで裸になって彼と一緒に入ろうと思ったのだが、しかし何故か顔を逸らしている黒男は「ちよっと用事思い出したわー」とか言ってくる。

「歩夢、やっぱり先に一人で入ってよ」

「いや、ん？ 水浴びしたいのは黒男じゃなかったっけ？」

「良いから良いから！」

「……？」

なんか頭がこんがらがるな。

ま、良いけどさ。

私は一人で風呂場に入り、それからシャワーから噴き出た温水を浴びる。

……なんか身体、べとべととしてない？

アブラゼミの鳴く頃に

ジージー、ジージー。

どこか遠くでアブラゼミの鳴く声が聞こえてくる。

まさに夏真つただ中つて事を私に伝えてくれる。

ただそれを聞くと暑い事も思い出させてくれるので正直ちよつと鬱陶しい。

もうちよつと音量を下げた欲しいとも思うし。

ただまあ、これもこれで夏の風物詩なのだろう。

我慢していつそ楽しむべきなのだろう。

そして、今日は八月の始まり。

毎年恒例の夏祭りの時期が今年もやってきた。

公園を丸々使って、そこで出店を出したり盆踊りを踊ったりする、

どこでも行われているような典型的な夏祭りだ。

私も毎年参加しているが、しかし今年は少し事情が異なる。

格好に気合が入っていた。

……お母さんから強引に浴衣を着せられた私は慣れない服装でフラフラしながら公園へと向かう。

到着して早々黒男の姿を探そうとしたが、しかし私よりも先に彼の方が私の方を発見したらしく、「歩夢」と声を掛けられる。

黒男はというといつも通りの格好だった。

まあ、知ってた。

なんて言うか似合わないそうだし、本人の性格的にも着たがらなそう。

それに、こういうお祭りの時にもいつも通りって方が彼らしい。

「今日は、浴衣、着て来たんだな」

「どーよ、似合う?」

「べ、別に。良いんじゃないかね?」

「そかそか」

否定されないのならば良いんだと思う。

着た甲斐はあったと考えよう。

少しだけホツとする。

「んじや、どこから回る?」

「まずは一周、かな」

「オツケー」

私達は並んで公園へと入る。

夏祭りは既に始まっていて、私のように浴衣を着ている子も、黒男のようにいつも通りの格好の奴も、平等に存在していた。

みながみな、それぞれ勝手に楽しんでいる。

凄く混沌しているし、とても楽しそうだ。

「で、何で既に食べ始めてんのお前?」

「ふあに?」

「フランクフルト頬張りながら歩くな、危ないから」

「ふおつて」

「いや自分で持——いや、両手塞がっていやがるし。しようがない——いや、待て。その状態でどうやってフランクフルト買ったんだお前?」

明らかに無理だろ。

不気味なものを見るような目で私の方を見てくる黒男。

いや、普通に買う時は強引に空いてた手で持っていたが?

私は仕方なしに手に持っていた焼きそばとお好み焼きを片手に持ち直し、空いた手でフランクフルトの刺さっている棒を持つ。

「じゃあ、食事は買ったし遊ぼうか。射的とかする?」

「……完全にフル装備の状態でか」

「ほら、私はあれだから。観測手だから」

「確かにお前の視力つて2.0だけど、ここで活躍させるものじゃねえだろ。ていうか射的に観測手はいらねえ」

「あ、見て黒男。スーパーボール掬いがある」

「話を聞いて」

それで、結局二人で射的の屋台に向かう事になった。

そこで私の身体に衝撃が走る。

「え、マジで? DXブライドライバーじゃん……!」

「なにそれ。おもちゃ？」

「なにそれにもなにも、プレミアムボンダイでしか買えない奴だよ！」

「……そんな代物を射的の景品にして良いのか？」

「ちなみにお値段税抜き12000円になります」

たっか。

黒男は目を丸くする。

あの変身アイテム、液晶が付いてていろいろな遊び方が出来るので、完全受注生産でその値段で買えるのはかなり安いと思う。

ちなみに私は買えませんでした。

ログイン戦争には勝てなかったよ……

「頑張つて、黒男！」

「イヤ無理だろ。ぶつちやけゴム鉄砲より威力が弱い射的の銃である明らかに重たそうな奴落とすのは。絶対アレ罨だつて——」

「やれば出来る！」

「……金は出せよ」

「ダメだったね」

「知ってた」

肩を落としながら歩く私と「なにこいつ馬鹿か」みたいな目で見てくる黒男。

「まあ、お腹は膨れたので良いとしましょう」

「いつの間に食いやがったんだお前……？」

射的で頑張っている間にこう、もぐもぐと。

美味しかったです。

「だけど、んー。一通り周り終えちゃったね」

「帰るか？」

「いや、それはそれで寂しいし何かしたい——ん？」

と、そこで何やら前方から子供達の集団がやって来る。

見覚えのある顔だった。

ていうかクラスメイトの男連中だった。

「おー、雛木に黒男じゃねえか！」

「貴方は確か、モブ男君？」

「モブ男って誰だ！」

「あつはつは、冗談だつて佐藤太郎君」

「絶対覚えてねえなお前！」

ちなみに彼の名前は本当に覚えていません。

すまん、だけど現時点でクラスメイトの名前を半分しか覚えきれないんだ。

彼は残念ながら覚えていない方にいる人間だった。

「いや、ていうかお前」

その、名前を憶えていない誰かさんの視線が私と黒男の間を行き来する。

なにやらにやにやしてるけど、何？

「何お前達、デートしてんの？」

その言葉で、一緒に来ていた連中が囁し立ててくる。

「うっわ、マジかよー！」

「なになに、お前等そーゆー奴だったの？」

「ち、ちげーし!!」

それに対し、黒男は過剰に反応を見せる。

「歩夢の事なんて、別にきら、いや、なんとも思つてねーし！」

「ツンデレかー？」

「な、……ばーか！」

顔を真っ赤にし、しかし上手い言葉が見つからなかったらしい彼はその場から走り去つてしまう。

その背中に向かって男達はなんか野次を飛ばしているけど、こいつらなー。

「あんたらねー、一緒に遊んでただけでデートになるならそこら辺恋人だらけになるでしょうが」

「ちげーのか？」

「違うけど」

「お、おー」

なにかぼそりと「黒男も可哀そうだな」と呟いていたが、残念なが

ら小さすぎて聞こえなかった。

はー、と溜息を吐く。

それから私は彼等に「じゃ、黒男追いかけるから」と断ってからその場から去る。

残念ながら格好が格好なので走りづらかったが、とはいえ走れない訳ではない。

公園を出て、それから車道に差し掛かる。

真つ暗で頼りない街灯に照らされたその場所の先で、黒男は肩で息をしながら立ち止まっていた。

どうやらいきなり走った所為で身体がびっくりした結果、持たなかつたらしい。

「おーい、黒男！」

私は彼に走り寄——ろうとして、途中でコケてしまう。

もしかしたら捻挫してしまったかもしれない。

横断歩道の上だけど、辺りはまだ真つ暗で車の光は見えないし、大

丈夫——

「歩夢ツツツ！」

黒男の声。

こちらに走り寄って来る。

なんで？

私は疑問に思いつつろろと立ち上がりながら

どん。

どこか遠くでアブラゼミの鳴く声が聞こえてきた。

セイウンスカイ

——奇蹟は起きない。

いつだって世界は予定通りに進行される。

リングが重力に引かれて大地へと落ちるように。

当たり前前の事が当たり前前のように起きては過ぎ去っていく。

そしてそれは、その日の夜も同じだった。

「歩夢ツツツッ！」

黒男が叫ぶ。

道路の向こうから走って来る、灯を付けていない車。

どうやら倒れて起き上がるうとしてしている歩夢の事に気づいていないらしい。

スピードを落とさないまま、こちらへとやってこようとしている。

黒男がいくら手を伸ばしたところで、今更歩夢に手は届かない。

目の前で車が歩夢を弾き飛ばす瞬間を見ているしかない。

その事を直感に理解した彼は——しかし、それでも歩夢の事を助ける為に身体を動かそうとする。

しかしあまりにもタイミングが悪すぎた。

歩夢が倒れた音で振り返り、そしてその時には既に事態は出来上がっていた。

そこから動き始めたところで、いや、それ以前に身体に上手く力が入らない。

だけど、それでも。

(あゆ、む……！)

彼女の身体が宙を舞う瞬間を見たくなくて思わず目を瞑る。

どすん、という金属の塊と肉とがぶつかり合う重々しい音が——しかしいつまで経っても聞こえてこなかった。

一体、何故。

その理由は、すぐに分かった。

分かったが、しかし理解が追い付かなかった。

(……は?)

すべてが。

固まっていた。

車も。

起き上がろうとする歩夢も。

光を求めて飛ぶ夏の虫も。

すべてが、止まっていた。

(これ、は)

混乱しつつ、しかし現実には黒男に一体何が起きているのかを教えてください。

(時間が……止まって、る?)

そうとしか思えない現象。

それをすぐに拒絶する事なく受け入れられたのは、彼が既に超常なる力を持っていたからだろう。

(なんにし、ても。これ、なら……!)

そうだ。

これなら、歩夢の事を助けられる。

彼女との距離は10メートルもない。

そして時間が止まっているというのならば、ゆっくりと歩いていても彼女の元に辿り着けられる。

それなら、早く。

彼女の元に行かないと——ッ!

(動かな、い?)

身体は、石のように動かなかった。

ぴくぴくと痙攣したり瞬きするほどの動きは出来る、しかし一歩踏み出したりは出来なかった。

まるで、そう。

自分の時も止まってしまったかのように。

身体を動かす事は出来なかった。

(う、動けよ)

願っても変わらない。

現実是不変ならない。

すべては予定調和に進行していく。

奇蹟は起きない。

当たり前前的事が当たり前前のように。

夢から醒めて現実に戻されるように。

ゆつくりと——時間が動き始める。

(ま、待て。待ってくれ。お願いします、お願いだから)

車。

ブレーキ。

歩夢。

きよとんとした顔。

振り返る。

——そして、彼女の身体は、視界の外へと消えた。

「……」

薬品の匂いが漂ってくる気がした。
病院の廊下を歩く。

目指すのは入院患者用の病室の一つ。

その場所にすぐに辿り着いた黒男は一度深呼吸したあと、ゆっくりと扉を開いた。

「あ、黒男」

来てくれたんだ。

歩夢は今までと変わらない、へにやつとした笑顔で黒男の事を出迎えた。

いつもと変わらないのは笑顔だけ。

彼女の体の所々は頑丈そうなギプスや包帯で覆われている。

「暇だったから、来てくれて嬉しいな」

「……大丈夫、なのかよ」

大丈夫な訳ない。

結論から言うのならば、彼女は全身の至る所を骨折するだけで済んだ。
腕や足、そして肋骨など。

しかし彼女曰く、どれも奇蹟的にぽつきり綺麗に折れたのですぐにくつつくし、何なら2か月もしない内に退院できるらしい。

「まったく、みんな大袈裟なんだよ。まあ、動き回れないし手も使えないからゲームも出来ないけど。だけど死んでないんだから、めっけもんだよ」

死んだら人生お終いなんだから。

何故かちよつと苦笑しながらそう言う歩夢。

「後遺症とかは、ないんだよな」

「それはね、ないよ。炎症も起きてないし、絶対完治するって。命賭けでも良いよっ。」

「……命賭けるとか、言わないでくれ」

「あーその。ごめん、ちょっと不謹慎だったかも」
それから歩夢は、ふーと息を吐く。

瞳が若干とろんとしているところから察するに、眠いのかもしい。
い。

「ごめん、俺帰るわ」

「えー、来たばかりじゃん。暇だからもつと話しようよ」

『ゆっくり眠って、それから元気になってくれ』

「ん、……」

歩夢のまぶたがゆっくりと重たそうに降りていき、それからすーすーという寝息が聞こえ始める。

黒男は音を立てないように病室を出て——そこで一人の女性と出会う。

「こんにちは、黒男君」

「……歩夢のお母さん」

黒男の言葉に「ちよつと良いかしら」と前置きをされる。

「その、ね。あまり気を落とさないで——と言っても、きつと無理なんでしょうね。だけど、貴方がいるお陰で、あの子は凄く嬉しそうにしてくれるの。だから、余裕があったらまた来てちょうだい？」

「……はい」

小さく頷き、それから黒男はその場を離れる。

どこかふわふわとした足取りをしていて、実際彼も今、本当に地面の上に立って歩いているのかどうか分からなかった。

……気づけば彼は病院の外にいた。

黒男は空を見上げる。

青空には真っ白な雲が高い場所に浮かんでいて、風に流されどこかへと向かっていた。

不思議とセミの鳴き声は聞こえてこない、いや、それどころか耳鳴りがして来るほどに周囲は静かだった。

まるで世界が終わってしまったかのようで、しかしだというのに空気はとても暑く、太陽は陽気な日差しを降らしていた。

黒男の頬を冷たい雫が伝った。

「夏休み——終わっちゃったな」

Fall in one キッズスペースのあかり

9月になっても夏の熱気はなかなか消えない。

とはいえ病院はエアコンで快適な温度に調節されているので不快に思った事はない。

むしろ窓から入って来る温かな風を心地よく思えるほどだ。

ただ、エアコンの効いた部屋に慣れ過ぎたら、今後エアコンのない生活に戻った時大変だろうなと思うけど。

そして全身の至るところの骨を折った私の回復度は一体どうなっているのかと言うと、かなり順調に回復している。

むしろ順調過ぎて怖いくらいだ。

なんにせよ、今では身体をがちり固定していたギプスは外され、代わりに包帯が巻かれている。

身体の自由度が増して大分動きやすくなり、お陰で今は自分でご飯を食べる事も可能になっていた。

いやー、他人にご飯を食べさせられるのって、どちらかというとなんげが増すのね、初めて知った。

ともあれ、身体も後もう少しで完全回復、これはもう退院もすぐかな、とそう思っていた。

全然違った。

ほぼ1か月ずっとベッドに固定されていた私の身体は当然のように筋肉とか諸々が衰えている。

それを復活させるために、そして骨達がしっかり私の体重に耐えてくれるように、リハビリが必要になって来る。

マジかよ。

マジです。

そこら辺の事をお医者様に聞いてみたところ、「2か月は骨折が最低限治る期間だから」との事。

リハビリの時間は入れていなかったらしい。

ちなみにリハビリは最低でも1か月以上は掛かるみたいです。

マジかよ。

マジらしい。

と、まあ。

そんな訳で心の中は変わらず「マジかよ」で一杯だったが、しかし早く家に帰る為にはいっぱいご飯を食べて栄養を取り、それからリハビリを頑張るしかない。

余談だが、この病院のご飯はかなり美味しい。

病院食は不味いとはなんだったのか。

そして一応車椅子に乗ってだけど病院内を自由に動き回れるようになった私は、最近キッズスペースに足を運ぶようになっていた。

一応私、12歳なので小児病棟を利用して、だからキッズスペースへも入れる。

そこでは私みたいに骨折しちゃった子供とか、あるいは原因は分からないけど点滴をしている子とかがいて退屈をしていた。

とはいえ、今は過疎しているみたいで、私含めて2人しかない。あるいは動き回れるのが私達くらいしかないのか。

元々そこまで規模の大きい病院ではないけれど、ちょっと寂しい。実際は、ここに子供がいない方がきつと幸せなのだろうけど。

と言う訳で、私は今日もキッズスペースへと足を運び、『彼女』に会いに行く。

案の定、キッズスペースでは『彼女』が手持無沙汰気味に本を読んでいるのを待っていて、そして私がやってくるのを確認するや否やぱつと表情を輝かせ「お姉さま！」と手を振って来る。

うーん、走り寄れない事をこんなにつらいと思った事はない。

看護婦さんに車椅子を押して貰い、私は『彼女』の元へと移動する。

「あかりちゃん、元気にしてたかな？」

「はい、お姉さま。あかりは元気です！」

聖園あかりちゃんはにこにここと笑いながら私を出迎えてくれる。

夜空を切り取ったような黒い髪に珍しい青色の瞳、身長は小柄で私よりも低い。

お姉さまと慕ってくれているが、しかし実際は同年齢同年代である。

聖園あかりと言う女の子は、この世界のヒロインの最後の一人だ。お嬢様キアラでかつ病弱キアラで、もしかしたら病院で会えるかなとか思っていたら、案の定だった。

それからコンタクトを取ったのだが、なんだかんだあって今ではとても仲良くして貰っている。

「朝ごはんはちゃんと食べた？」

「はい、お姉さまが好き嫌いしちやだめって言ってたから、あかりは残さず食べたよ」

「うむ、偉い偉い」

「えへへ♪」

頭を撫でて上げると彼女はにへらと表情を綻ばせて喜びを表現する。

うーん、素直な子だな。

可愛いくてまるで天使みたいだ。

「あ、そうだ。今日も髪梳かしてあげよっか」

「良いの？」

そう控えめに聞いて来るが、しかし彼女はまるでして貰いたいと言わんばかりにうずうずとしている。

「うん、私のリハビリに付き合ってよ」

「えへ。お姉さまがすぐに元気になる為だもんね」

と言う訳で看護婦さんに手伝ってもらって位置を調整し、早速あかりちゃんの髪を櫛を使って梳いていく。

とはいえ、必要がないほどにあかりちゃんの髪は滑らかでさらさらだ。

どちらかというところは感覚を楽しんで貰うって感じになっている。

実際、彼女は気持ち良さげに「んー」と小さく唸っている。

うむ、何よりである。

「いやー、私もあかりちゃんみたいな妹が欲しかったよー」

「あかり、お姉さまの妹になるよ?」

「血が繋がってないからね」

「うん、それは本当に良かったと思ってるよ」

「そう、ん? え、なんで?」

「だけど、お姉さまが元気になつたら退院しちゃうんだよね」

と、あかりちゃんは少し寂しそうに言う。

「いやだな。あかり、ずっとお姉さまと一緒にいたい」

「それはだめだよ、あかりちゃん。あかりちゃんも早く病気を治して、退院しないとだよ」

「それなら、お姉さま。一緒に退院したら、またいっぱい、いっぱいいっぱいあかりと遊んでくれる?」

「当然だよ。他ならぬ、あかりちゃんの願いだからね」

「えへ……お姉さま、好き。大好き」

「私も大好きだよ」

ふふ、と笑いながら彼女の髪を梳かしていく。

……最初から髪は綺麗な状態だったので、その時間はあつという間に終わってしまった。

「はい終わり」と言うとおかりちゃんは名残惜しそうだったが、それでも聞き分けがよく「分かった」と頷いてくれる。

「じゃあ、今度は何をやる?」

「それじゃあ、一緒に本を読む?」

「あー、本か——今、なんて本を読んだの?」

「それはね、お姉さま。これは——」

「歩夢?」

そこで、キッズスペースの入り口から私を呼ぶ声がした。

聞き覚えのある声だった。

ていうか、黒男の声だった。

「おー、黒男。来てたんだ」

「やっぱりここに来てたんだな」

「いやー、良かったよ。やっぱり遊ぶのは大人数の方が良いし、ちよつと付き合つてよ」

「――黒男？」

その声は。

おおよそ子供が出して良いものではない、全身を氷結させるほどに冷たい声色をしていた。

「毒島、黒男」

振り返ると、聖園あかりちゃんは黒男に向かって冷たい視線を送っていた。

あれ。

もしかしてあかりちゃん、黒男の事、嫌いだったり……？

秋が終わるその時まで

「こんにちは。黒男、さん」

にこつと笑って挨拶をするあかりちゃん。

あれ、さっきの冷たい視線は見間違えだったかな？

いやまあ、この可愛くて優しいあかりちゃんがあんな恐い表情をする訳ないし、きつと私の勘違いだったんだろう、うん。

そしてキッズスペースに入ってきた黒男はあかりちゃんを見て少し警戒した表情をする。

正確に言うならば、人見知りしている感じだった。

「え、つと」

「聖園あかりと言います。聖園と、そう呼んでください」

「あ、あ。俺の名前は——」

「毒島黒男さん、ですよ。お姉さまから、しっかりと、お話は聞いております」

「お姉さま……？」

ちらつとこちらを見てくる。

やめろ、強引に呼ばせているのかこいつって視線を向けてくるな。

私とあかりちゃんがとても仲が良いからそういう風に呼んでくれているし、呼ばせているんだよ。

文句あつか？

「いや、でも。二人とも、もしかして一緒に何かしてたのか？ ……邪

魔だった、か？」

「ううん、大丈夫だよ。二人でやる事にも限界があったし、黒男が来てくれたのは僥倖だったかも」

「ぎよーこー？」

「ちようど良かったって事だよ」

「時々歩夢って難しい言葉を使うよな」

「年の功と言いたまえよ、君い」

「同じ年だろうが」

「そりやそうだけどね、つと。ともかく折角来たんだから、一緒に遊ぼ

うよ——あかりちゃんはどうか？」

私はあかりちゃんに尋ねる為に彼女の方を見——そこで彼女が凄く寂しい表情をしている事に気付く。

「あかりちゃん、もしかして二人きりで遊びたかった？」

「い、えその……ただ、二人はとても仲が良いんだな——って思っちゃって」

「そりゃあ一応そこそこ長い付き合いだしね。幼馴染って奴」

「それはあかりも、知ってるよ？ だけど……」

あかりちゃんは目をきゅつと瞑る。

まるで何かを我慢するかのよう、何か思いを閉じ込めるかのよう。

「黒男さんは、その。お姉さまとはよく遊んでたのですか？」

「え、ん。そう、だな。結構遊んでいたとは思うぜ？」

「それは、良かったですね……」

素直に羨ましいです。

彼女は言う。

「お姉さまもお姉さまで、黒男さんと話していた時、とても嬉しそうでした」

「あかりちゃんと話すときだって、私はとても嬉しいよ？」

あかりちゃんもしかして自分と一緒にの時は我慢して接しているのではないかと思っちゃったのだろうか？

それなら違うと否定したのだが、しかしあかりちゃんは首を横に振る。

「あかりもお姉さまと一緒にいて、とても楽しい」

「それは良かった」

「今まであかり、独りぼっちだったから。病院にずっといて、遊ぶ友達もないのは、それは私に勇気がなかったのがいけなかったからなのかもだけど。だけとお姉さまが話しかけてくれた時、あかり、とても嬉しかった」

凄く凄く、嬉しかった。

「だけどね。あかり、分かっているの——お姉さまは、私が退院するよ

りも早く、ここからいなくなっちゃうん、だよね？」

「それは……」

「それは凄く良い事だよ！ それは知ってるの、だけど——だから！
あかりはお姉さまとの時間は大切にしたいくて」

彼女は少しだけ潤んだ瞳をし、決意の籠った口調で言う。

「病院にいる間は。私と、一緒に一杯遊んで欲しいんです」

「それは、」

「歩夢」

私何か答えるよりも早く、黒男が踵を返す方が先だった。

「俺、やっぱ帰るよ」

「いや、でも」

「歩夢、俺からのお願いだよ。その子、あかりだっけ？ 一緒にいられる時間は限られているんだろうし、それなら一緒にいてやってくれ」
そう一方的に言い、一度にこりと笑ってから、こちらの返答を待たず黒男はキツズスペースからいなくなる。

その背中を見、あかりちゃんは申し訳なさそうにしつつ——喜びが隠しきれしていない感じだった。

「……お姉さま。私、最低かな？ 黒男さんだってお姉さまと一緒に遊びたくて来てくれたのに、邪険に扱っちゃって、それで」

「それ以上は言っちゃいけないよ、あかりちゃん」
ぽん、と彼女の頭に手を乗せる。

「黒男だって、そこまで子供じやない。いろいろ考えた上で帰ったんだよ。その意思は尊重しなきゃだよ」

私とあかりちゃん、二人の関係を考えてくれた。

いなくなった事は寂しいけど、だけどそれは彼が私とあかりちゃん
の事をよく考えてくれたからだ。

「だから——」

「うん、お姉さまは多分、分かってない」

「ん……？」

「分かってないままが、良いの……」

「どういう事？」

しかしあかりちゃんはその事の答え合わせはしてくれず、ちよつと無理気味に笑顔を浮かべながら言う。

「じゃあ、何をしよつかお姉さま！」

「……そうだな、じゃあやっぱり当初の予定通り、本を読もうか」

「うん、うん！ それじゃああかり、この本を読んで欲しいな！」

彼女が持つてきた本を手に取りながら、私は微笑む。

あかりちゃんと今、一緒にいられる時間は少ないけど、それまでは彼女が満足するまで一緒にいて上げよう。

イドバタバタバタ

黒男は一人帰路に就いていた。

本来だったらら病院でしばらく歩夢と共に時間を過ごすつもりだったが、しかし事情が事情だったのでやむを得ない。

やむを得ないと感じる程度には、あかりの言葉は黒男にとって無視できないものだった。

「一緒に一杯遊んで欲しい」

それは自分だって願ったものだったし、そして結局叶えられなかったものだった。

後悔してもし切れない。

自分があまりにも愚かで、何より自分勝手だったから。

そしてそれが歩夢を怪我させる結果になってしまった事が、何より黒男は許せなかった。

一応歩夢の言葉を信じるのならば、彼女は順調に回復に向かっている。

ああしてキッズスペースで友人(?)と遊ぶ事が出来ているのだから、そうなのだろう。

聖園あかり。

どこか自分に似ている少女。

シンパシーを感じている訳ではない。

ただ、鏡写しの自分の姿を見せられているようで、見ていて正直気まずかった。

一体全体、性別も見た目も全然違う彼女にどうしてそんな感情を抱いているのかは分からない、ただ直感的にそう思ったただけだ。

どちらにせよ、気まづくは思ったが別に悪感情を抱いている訳ではない。

むしろ同情すらしている。

一人きりで病院で入院しているのは精神的にとっても苦痛だと思う。きつと両親もずっと一緒にいられる訳はないだろうし。

それが歩夢と共に時間を過ごす事で和らぐのならば、それに越した

事はない。

……なんていうか、ここ数か月で自分は変わってしまったような気がする。

前まではもつと自分に我儘だった気がする。

それがどうして、今では歩夢と、そしてその友人の事を気にかけているのだろうか？

ただただエロい事を考えて、歩夢と一緒に遊んで、隙を見て何とかして手を出そうとして——失敗する。

その時間がとても好きで——心地が良かった。

だけど今はどうだろうか？

歩夢はいない。

黒男は独りぼっちだ。

学校で喋る連中もあくまで「共通の話題を持つクラスメイト」ではないし、そこから「遊びたいと思える友人」には進展しない。

それ以前に、黒男は誰かと一緒に遊ぶ気にはなれなかった。

自分の所為で歩夢が病院に入院しているのに、自分だけが心地良い時間に浸っている？

そんな事、出来ない。

出来る筈がなかった。

とはいえ、何もせずにいる訳にはいかない。

人間である以上生きていかななくてはならない。

そういう気分ではないけれども、必死になって歩んでいかななくてはならないのだから——

「……………」

そうして道を歩いて、そして家がある角を曲がるところまでやって来ると、何やら話し声が聞こえてくる。

女性の声だ。

そしてそれはイヤでも聞き覚えのあるものだった。

(母……)

一人は自分の母親。

そしてもう一人は、歩夢のお母さんだった。

黒男は思わず角を曲がらずに息を潜め、そして二人の会話を聞く事にした。

「——そういえば、御宅の娘さん事故にあつたんですってね？」

開口一番、自分の母親がどこか嬉々とした口調で言うのが聞こえてきた。

「一体どうして？　もしかして御宅の教育が悪いのかしら」

「そうねえ、私としてはもっと男の腕を掴んで逃がさないようにしておきなさいと言っているのですが」

「男を必死に捕まえていないと逃げられちゃうようなところ、誰に似たのかしらね？　それとも、どこにも学習塾に通っていないみたいだし、頭が悪いんじゃない？」

「馬鹿なのは確かにそうね、あれが頭が良いって事になるのならば世界がひっくり返るわ」

「あらあら、お母様にも見放されるなんて、本当に可哀そうな子っ」

聞いていられなくなった黒男は角を曲がって二人のところへと歩いていく。

黒男の姿を見、自分の母親はまるで鬼の首を取ったかのような表情をする。

「あら、黒男——」

「『早く家に入ってるよ』」

「……」

彼の言葉を聞き、黒男の母親は黙って家に入っていく。

歩夢のお母さんの方に向き直った黒男は「ごめんなさい」と頭を下げる。

歩夢のお母さんはいきなり現れた黒男、そして彼に言われて素直に従った母親の姿に驚いたものの、すぐに笑顔を見せる。

「別に、良いわよ。親の事で息子が謝る必要性はどこにもないんだから。それより、貴方の方が大変、でしょう？」

「でも——」

「それより、歩夢はどうだった？」

「それが、その……病院の友達と仲良くしてて、それで」「帰ってきた、と」

まるで責められているようで、黒男は顔を伏せる。

そんな黒男の姿に苦笑した歩夢のお母さんは「もう」とその頭を撫でる。

「貴方が恥ずかしがり屋なのは、私も知っているわよ。でもま、もうちよつと勇気を出すべきね」

「それは、でも」

「ま、女の子の間に挟まるのはなかなか大変だしね。ある意味帰って来たのは正解かも——次は、一人でいるチャンスを探して、アタックしてみなさいな」

「は、はあ……」

なんでこの人、自分に対してこんな事を言ってくるのだろうか？

特に最近はおからさまになっているような気がするけど、一体なんで？

とはいえ黒男としては普通に話をする事が出来る重要な一人なので、「分かりました」と相槌を打ち、それから「それじゃあ」とその場を後にする。

家に入り、それから自室へと入る。

扉のカギをしつかり閉じ、それからパソコンの電源を入れた。

今度会う時の話題でも探しておくか。

そんな軽い気持ちでネットサーフィンを開始する。

そしてウェブニュースの一面を見、首を傾げた。

「……密輸業者が持ち込んだ危険生物の一体が、脱走？」

初めての大切な記憶、靄が掛かる

少しだけ、昔のお話を。

毒島黒男、つまり彼と私が出会ったのはお互い4年生になった時だ。

その頃、私は家の事情で現在住んでいる家の場所に引っ越す事となった。

家の事情と言っても仕事の事情ではなくいわゆる夢のマイホームって奴である。

今までアパート暮らしだった私は新しい広い家に胸を躍らせた。

で、様子見に来た時にちょうど彼と出会った訳だ。

その日も、暑い夏の日だった。

なんて言うか、第一印象はカワイイ奴だなと思った。

こう、名前と前世知識、そして直感で目の前の男の子が将来の竿役間男だと確信した筈なのに、目の前の男の子は人畜無害そうに感じた。

女の子を相手するのに如何にも慣れてないって感じの雰囲気。

むしろここからあんな鬼畜になれるのだろうかとこちらが心配になつて来るほどだった。

顔を真つ赤にして、その顔も私の方を見ず、どもりながらも偉そうに話す。

本当にもう、年相応だった。

その後すぐの事だった、彼と一緒に遊びに行こうと誘われたのは。

私は友好的な関係を築きたいと思っていたのですぐに彼の誘いに乗り、そして公園へと向かった。

いつも通りの公園である。

当然バッグの中には携帯ゲーム機を入れ、後はマンガとかカードゲームとかも入れた。

これだけあれば何かしら彼の琴線に触れるでしょ。

公園について、それから私はバッグを地面の上に置く。

重たくはなかったけど、暑いし蒸れるし、早く下ろしたくて仕方が

なかった。

「ふー……ん？」

なんか視線を感じる。

バッグを下ろした体勢のまま、私は顔を上げる。

なんか黒男が顔を更に赤くしていた。

さながらトマトである。

「ん？ 黒男、何見てんの？」

「あ、ば——その、『その体勢でいろ』」

「……だからなに？」

「な、なんでもねーよ！ そ、それより今日は何するんだよ」

「何するって……公園に行こうって言ったのは黒男の方だったじゃない？」

「そ、そだったっけ？」

「そだったそだった」

「え、あー、つと。こういう時何すれば良いんだ……」

うーんうーんと悩む黒男。

しかし私は何故かその時膝がガタガタ言って立っている事が出来なくなった。

産まれたばかりのバンビちゃんの如く足がぶるっぶるで、そして最終的に私は前に倒れる事となった。

そうなれば当然目の前に黒男がいる訳で。

私は勢いのまま、黒男を押し倒す事となった。

いや、それは押し倒すと言っても良いんだろうか？

私は彼の腰辺りにぶつかった訳だから、押したというより体勢を崩させたって方が正しいかもしれない。

なにせよ彼もまた私と一緒に倒れ、そして私は「んぎゅ！」と声を漏らしてしまう。

「いったー」

私は無意識にぐりぐりと頭を、額を彼の身体に擦り付けてしまった。

何やら体と言う割に柔らかかったが、一体どこに私は頭を擦り付け

てるんだ？

思わず目を閉じながら身体を起こす。

そして恐る恐る目を開けて、そして黒男の状態を目の当たりにする事になった。

黒男は目を白黒させていた。

一体何が起きたのか分かってないって感じだ。

ただ、——その。

びつくりしちゃったからなのかもしれない。

下半身、ズボン。

……股間のところが、若干沁みになっていた。

あー、その。

これはー……

「な、あ……なっ」

ぱくぱくと陸に上がった鯉のように口をパクパクさせる。

しばらくそうした後、彼は叫ぶ。

「お、『おしつこだから！』」

お漏らしなのは分かってるが？

「帰るー」

お、おう。

ズボン新調してきなー。

「これで勝ったと思うなよっ！」

いや、別に私は何もしてないが？

そうしておっかなびつくり立ち上がった彼は顔を真っ赤にして、あるいは真っ青にしてその場から立ち去っていく。

一人残された私は、何が何だかつて感じてその場に残されるのだった。

「——みたいなのが、私と黒男の最初だね」

「はあ……」

私の話を聞いたあかりちゃんはとうとうこっちやと言った感じの表情を浮かべた。

「お姉さまって、その」

「なに？」

「実はタラシだったりする？」

「あかりちゃんよく「タラシ」なんて言葉知ってるねー」

私は感心しつつ、彼女の髪を櫛で梳かす。

「いやね、私。それでも学校では全然モテないってか友人自体が少なくて。それはあまりお見舞いに人が来ないところから、分かるでしょ？」

「酷い話だよね」

「ま、一人の方がゲームをずっと出来るから良いってのもあるけどね」「うーん……？」

良く分からないって雰囲気なあかりちゃん。

「私は、一人よりお姉さまと一緒にいる方が好きだよ？」

「ホントねー……あかりちゃんはカワイイ事を言ってくれるなー」

身体が十全なら抱き着いていたと思う。

代わりにもっと気持ち良く髪を梳いてやろう。

えい、えい。

「でも、お姉さまは誰ともそんな感じだったのは、ちょっと分かった」「んー……？」

良く分からないけど、納得しているのならそれでいいか。

ブルーローズを手折る様に

「あかりちゃんは身体が弱いんだから大丈夫よ！」

それは聖園あかりが良く聞く言葉だった。

病弱で生来身体が脆かった彼女は常に両親から心配されて育ってきた。

ちよつとした事で体調を崩しがちだった彼女の事を両親は常に気にかけていて、だからちよつとした無理も彼女にはさせなかった。

それはすべて、彼女の事を愛していたからだろう。

しかし、それでも。

(お母さんも、お父さんも、私の事も見てない)

常に完璧に計算され尽くされた食事を時間通りに食べ、完食はせずに腹八分目で終わらせる。

眠る時間も決められていた、本なんて読んで貰った事もなかった。

外で遊んだ事もない、お友達を作った事もない。

勉強だって、本当はもつとやりたかった。

自分の夢、願望、欲求。

それらを一切叶えてくれないのに、両親は何時だって「あなたの為だ」と言う。

不思議だった。

どうして自分はこんなにも心が虚ろなのに、それを気づいてくれないのだろう。

愛しているって、心の底から言えるんだろう。

それがとても、あかりにとっては不思議で仕方がなかった。

病院に入院してもその疑問は常につき纏った。

いや、あるいはマシになったかもしれない。

(お医者様は、それがお仕事だから)

お仕事を遂行しているだけなのだから、仕方がない。

聖園あかりの事を考えずに聖園あかりの事を第一にする。

矛盾しているようで、間違つてはいないと思う。

それでも、結局のところ自分の環境は変わらない。

まるで檻の中にいるようだった。

見る事の出来る風景が固定され、移動出来る範囲は決められて、食事は何時だって他人が持つて来たものを見られながら食べる。

快適なのは間違いない。

誰よりも大切にされているのだろう。

それでも、でも。

(私は――)

そんなある日、聖園あかりは雛木歩夢に出会った。

自分の活動範囲であるキッズスペースで時間を持て余していた時、偶然出会う事になった彼女は開口一番あかりに尋ねてきた。

「貴方、名前はなんて言うの？」

自分の周りにいる人間は何時だって自分の事を知っている事が第一条件だったので、ある意味自分の名前を聞かれるというのはとても新鮮だった。

おずおずと「聖園あかり、です」と名乗ると、彼女はきらりと目を輝かせた。

「聖園あかりって言うんだ？ 道理で病弱そうだった！」

どういう意味？

しかしそう尋ねるよりも前に歩夢が矢継ぎ早に言葉攻めをして来る。

どこに住んでいるのか、とか。

どんな食べ物が好きなのか、とか。

そんな取り留めのない事。

それは聖園あかりにとって正直どうでも良いような――いつも憧れていた事だった。

こんな風に誰かからどうでも良いような事をされたかった。

無味無臭の毒にも薬にもならない、全く持つて意味のない事を。

ドキドキと決して強くない心臓が鼓動する。

高揚で眩暈がする。

それでも決して気持ちは昂るばかりで、何時までもこうしていたいと思つた。

結局途中で看護婦の人に止められ、病室に戻る事になった。

帰る途中、その人に雛木歩夢という女の子が車に轢かれ入院している事を知つた。

そうには見えなかった。

いや、車椅子に載せられた彼女は全身包帯塗れだったのでこれは絶対物理的に怪我をしたのだろうとは思つてはいた。

しかし彼女から発せられるいくつもの元氣な言葉達からは、そんな事故に遭つたという悲壯感などを感じられなかった。

それ以上に、目の前の聖園あかりの事を知りたくて知りたくて仕方がないって感じだった。

自分みたいに脆い存在に対して興味を示してくれる。

正直どうしてだろうと思つた。

だって、自分の事を知れば知るほどにその扱いが如何に難しく、そして面倒かが分かつて来るだろうから。

そしていずれは他人行儀になる。

しかし——むしろ歩夢の勢いは増すばかりだった。

もしかしてこの人、自分の事なんてどうでも良いと思つているのだろうか？

ふと、そのように思つた。

それなら自分がどうなろうと知つた事ではないだろうし、自分勝手に話しかけてくる理由の説明にもなる。

それでも良かった。

それで良かった。

だって自分は、その自分勝手さに助けられたのだから。

赤の他人から乱雑に扱われるなんて経験、今までした事がなかった。

すべてがすべて未経験。

だから、今度は自分が彼女と同じように踏み込む番だと、そう思つた。

(お姉さま……)

最初こそ驚いていたけれど、だけど受け入れてくれた日の事を今でも覚えてる。

その表情を見て、してやったりとも思った。

その後、すっかりやり返されけど。

そんな風に子供みたいに馬鹿馬鹿しいやり取りを出来る事が、何より嬉しかった。

だけどこの時間は永遠ではない。

いずれ歩夢は回復し、病院から退院する。

そうなったらまた、自分は独りぼっちだ——でも。

だけど、もう大丈夫。

私はもう、沢山お姉さまからぽかぽかするものを貰ったから。

だから、大丈夫。

これさえあれば、一人でも頑張れるんだ。

もしかしたら目の前に広がる檻をこじ開けられるかもしれない。

そんな風に思えるほどに、自分は成長出来たのだ。

そんな時だった。

聖園あかりが、毒島黒男に出会ったのは。

獣が鳴く頃

雛木歩夢の回復は人並み外れたものだった。

そもそもとして骨折自体が綺麗なものであったのですぐにくっついたというのもあったが、筋肉の衰えもほとんどなく、その為すぐに松葉杖について歩けるようになっていた。

この調子ではすぐにそれも必要がなくなるだろう。

そして、だから病院にいる必要がなくなってしまうたのは間違いないかった。

「少しだけお別れになるのは、正直寂しいね」

歩夢はどうやら再びどこかで会えるようになる事を信じてやまない様子だった。

確信しているようにも見えて、その自信は一体どこからやって来るのだろうかとあかりは不思議に思っただけで仕方がなかった。

とはいえ、彼女のそういうところを一々突っ込んでいたらキリがない。

あかりは曖昧な笑みを浮かべながら、「そうだねお姉さま」と相槌を打つのであった。

とはいえ、あかりもあかりで体調は良好だった。

今では点滴も不要で少しなら病院の中庭に出る事も許されている。だから……と言う訳ではないが、今日、彼女は一人で中庭をとぼとぼと歩いて時間を潰していたのであった。

今までは看護婦の人と一緒にいる事が条件だったが、今日はこっそり抜け出している。

多分、いや、絶対この後怒られる。

もしかしたら病院では混乱が起きているかもしれない。

そのような想像してもなお、あかりは病院に戻ろうとは思わなかった。

考えるのは、歩夢の事。

そしてこれからの事。

歩夢はまた会えると信じているみたいだが、しかしあかりはそう楽

観的には考えられない。

どうしようもない程後ろ向きで、ネガティブで、なにより悲観的だった。

だからきつともう彼女とは会えないと思っっているし、その事を考える度に心が重たくなっっていく。

そして、そうすればそうするほどに頭を締めていくのはあの男の子。

(毒島、黒男)

歩夢曰く、彼女の幼馴染。

歩夢と一緒にいる事を許されている存在。

どこか自分と似ているところがある男。

そして、彼女がそんな事を考えていたから、なのだろうか？

いや、そんな事はないだろうとあかりはすぐに否定する。

この世界は何時だって予定通りに進行する。

だからこれはきつと——あくまで予定調和なのだろう。

病院の中庭にあるベンチの上に、毒島黒男が座っているのを目撃したのは。

……声を掛ける理由はない。

そもそも正直言つて、あかりは彼の事を嫌っている。

だから本来ならば無視するべきだった。

だがしかし、彼女はこういう訳か黒男に接近して声を掛ける。

「……なに、しているんですか」

あかりの問いを聞き、そこでようやく彼女の存在に気付いた黒男は目を見開く。

「お前は」

どうやら名前を思い出せないらしい。

お前の事なんかどうでも良いと言われているようで、少しイラっと来る。

「あかりです。聖園あかり」

「ああ、歩夢の友達の」

「それで、何をしているんですか貴方は」

「それは——」

彼は瞳を動揺で揺らす。

「——なんでもねえよ」

「お姉さまに会いに来たのですか？」

「……」

「会いに行けばいいのに、勇気がないんですか？」

自然と言葉に棘が出てしまう。

そしてその挑発的な言葉に黒男はどうやらむっとしたらしい。

「お前には何も関係ないだろ」

「そうですね。だから、こうして無神経に言えるんです」

「そう言うお前こそ、歩夢と何かしてればいいんじゃないか？ そつ

ちの方がずっと有意義な筈だと思うけど」

「それ、は」

思わず黙ってしまうあかりの姿を見、黒男は何を思ったのかは分からないが、ともかく「ごめん」と頭を下げる。

「なんで謝るんですか。貴方には関係がないでしょう、黒男さん」

「いつも一緒にいるのに今日はそうじゃないって事は、何かあったんじゃないか？」

「ないですよ、そんなの。貴方がそんな風にお姉さまと一緒にいなくても大丈夫なように、私だってお姉さまと一緒にいなくても、大丈夫なんです……！」

「……別に、あいつと一緒にいなくても大丈夫って訳じゃねーよ」

イライラする。

いらいらする。

なんでこの人の言葉を聞きたびにこう、心が掻き乱されるのだろう。

ああ、そうだ。

自分は、この人が羨ましいんだ。

何もかも自分が欲しいものを持っているのに、それをすべて無駄にしている。

それが分かってしまうから、腹立たしいんだ。

「私は、黒男さん——貴方の事が、嫌いです」

だから、ついその思いを吐露してしまう。

「お姉さまとこれからも一緒にいられるから、そんな風にここにいられて。そんな風に感傷に浸っていられる、貴方は、ズルい……！」

「おい、お前——」

「貴方は、ズルいです……っ！」

我慢、出来なかった。

——そして気づけばあかりはその場から立ち去っていた。

動き慣れない足を精一杯に動かし、走る。

走る。

……走る。

そして、病院内にある木々が生い茂り涼しげな風が通り抜ける場所に辿り着いたところで、ようやく立ち止まる。

急に動いた事で気持ち悪くなった。

だけどあの場所にいたくなかった。

羨ましくて妬ましくて、仕方がなかった。

だから——

がさり。

「……え」

最初に聞こえたのは枝葉の擦れる音だった。

風で揺れた音なのかと思い、それでも条件反射的に音のした方を見る。

「……え」

そこにいたのは、一体の獣だった。

真つ黒な獅子のようなボディ。

しかし頭部はどう見ても山羊のそれ。

そして背中には真つ白な羽根が生えていて。

そして尻尾に当たる場所には蛇が生えていた。

脈略のない、どうしてこんないきなり。

突然の出来事に言葉を失い、呆然自失となるあかり。

——しかし、そこで彼女が正気を保っていたとしても、結局結果は同じだっただろう。

即ち、すべては予定調和に進行する。

シュツ……！

その獣に生えた蛇が、槍の刺突かと思ってしまうほどの勢いであかりへと迫る。

……そして、その蛇の大口が「がぱり」と開き、あかりの太ももに勢いよく噛みつく。

「……えへ？」

最初に感じたのは微かな痛み。

……次の瞬間、彼女は立っている事すら儘ならなくなる。

「あ、あああ、あ、あ、お、お、お、お、お、お、ツ！」

痛い、痛い、痛い、痛い。

地面に倒れ伏しのたうち回る。

そうしている間にも痛みは増し——そしてある一定のところである、痛みが消えた。

代わりに彼女の身体を襲ったのは——脳みそを掻き乱すほどの知らない感覚。

彼女がもし成熟していたなら、もしかしたらそれが『快樂』であると認識していたかもしれない。

しかし、人間にとって知らない感覚というのはすべて毒である。

ビクビクと身体を痙攣させたあかりは地面の上でのたうち回る。

それを黙って見下ろす獣は——舌なめずりをした。

ちよろ、ろろろろ……

あかりの股間から小水が流れる。

身体中が弛緩し、溜まっていた水分が流れ出てしまった。

べろっと飛び出た舌からはとろとろと唾液が零れ、鼻からは鼻水が噴き出ている。

雫のような涙を流しながら、朦朧とする意識の中あかりは思考する。

(これは、罰なの……?)

夢を見てしまった罰。

……歩夢と一緒に生きていく、そんな取り留めのない夢を見てしまったから。

だから神様が怒ったの？

なんで？

私、悪い事をしちやったの？

しかしその疑問を誰も答えてくれない。

ただ、罰は粛々と執行される。

獣がその鋭き爪で彼女の身体を――

「おおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

――雄叫びが聞こえた。

驚き飛び退く獣の代わりに、そこに現れたのは憎たらしい男の姿

だった。

なんで、どうして。

ここに、いるの？

「りよ、ひ、へ……？」

「そんなの、決まってるだろ……！」

質問になっっていないその言葉を聞いて黒男は叫ぶ。

「俺が好きなあいつの事を好きでいてくれる、お前を守る為だよっ！」

黒男は足元に落ちていた拳大の石を拾い上げ、構える。

「『来いよ、化け物』」

きつと睨みつけるが、しかしその足は震える。

恐怖を感じて逃げ出したくなるその気持ちを……噛み殺し。

黒男は啖呵を切る。

「『来いよ、お前の相手はこの俺だッ』!!!」

刹那の決着

とはいえ威勢よく啖呵を切ったものの、黒男の勝利は極めて難しいものだった。

第一に重要なのはあかりの生還。

これは前提だ。

彼女を傷つけてはならない。

そしてそれは今のところ何とかなっている。

自分に注意を向け、そのままじりじりと移動する。

これなら何とか自分にとって都合の良い展開に持っていけるのではないかと淡い期待をする。

しかし、やはりそう上手くいつてはくれない。

その獣はすぐに混乱から立ち直り、目の前にいる黒男が小さい子供でしかない事を判断する。

——取るに足らない障害でしかない事を理解する。

そしてすぐに排除するべく、大地を蹴って飛び掛かってきた。

「……っ、『止まれ』！」

一瞬の、硬直。

しかしすぐにその身体は自由になって再びゆっくりと移動を開始する。

(やっぱり、完全には効かないか)

そもそも動物に効くかも怪しかった。

自分に注意を向けられただけでも御の字だったし、さっきのように動きを牽制出来たのも良かった。

しかし、そう何度も効くとは思わなすべきだろう。

今のところ、あちらは黒男をあくまで障害としてしか見ておらず、簡単に倒せるものと思っているみたいだ。

だが、本格的に敵とみなして排除しようとし始めたら、どうなるか。

そうなる前に、早期の決着が望ましいだろう。

(そもそも、倒す必要はないのだけど)

第二に重要なのは、自分の生存。

そしてそれは別に目の前の獣を倒す事が条件ではない。

究極の話、目の前の獣がここから立ち去ってくればそれで良いし、運良く武装した集団がやって来てあの獣を排除してくれても良い。ただ、ここは病院の死角、デッドスペースとも言えるべき場所。人はやって来ない、助けの声を上げてても聞こえない。

だとしたら、やはり――

(自分で何とかするしか、ない)

黒男はまず自分の手の内にある石に意識を向ける。

武器は、これだけ。

なんて心許ない。

どう考えても、「どうにか」出来るとは思えない。

あんな怪獣染みた奴を倒すのならばそれこそ機関銃とか必要になつてくるのではないか？

全速力で投げたら、どうにかなるか？

その頭蓋骨を打ち砕けば、何とかなる？

しかし相当な勢いと威力で投げつけないと無理だろう。

そんなの、普通の小学生には無理だ。

そして幸い、自分は普通の小学生ではない。

「時よ止まれ」

刹那、時間が停止する。

否、少しだけ違う。

ゆっくりと時間は経過しているようだが、その動きがゆっくりなので一瞬時が止まっているような錯覚をしてしまう。

そんな中、黒男は自身に告げる。

『動き出せ』

自らの身体に催眠術を掛けて強引に力を引き出す。

ギチギチと身体が悲鳴を上げるのを感じる。

しかし、時が止まっている中で黒男はまだまだ水中の中にいるよう

にのんびりとした動きだったが、それでも動き出す事が出来た。
時間停止。

黒男はこの能力を『思考能力の超高速化』と定義した。
思考を高速化する事で時間が停止しているかのような錯覚を覚え
ていると、そう考えた。

その中で動くためには、思考と同等の速度で動くしかない。
それを実現するためには——身体能力を強引に解放するしか
なかった。

幸い、黒男にはその手段を持っていた。

無論代償は多少支払わなければならぬだろう。

常人が普通に引き出せない力を無理に出しているのだから。

だけど、それでも。

(今を、生きる為だ)

黒男は全身を使って石を振りかぶる。

今でも結構無理している自覚はあるので、ここから更に無理な事
しようとは思わない。

全身の筋肉を使って——そして。

「……ッ!!!」

砲丸の如き勢いで射出される、石。

——次の瞬間、時間が解放された。

すべてが早くなり、音が復活する。

流星の如き勢いで石が飛んでいくのをちらつと見——黒男はずつ
こけそうになる。

身体を精一杯振り回し、転倒を防ぐ。

——そして何かが砕け、弾ける音が聞こえた。

顔を上げると、そこには石が脳天に半分埋まり、痛みにのたうち回
る獣の姿があった。

しかしそのように動いていられるのも一瞬だった。

すぐにばたんと大きな音を立て倒れ、その場でびくびくと痙攣し始
める。

「よ、っし……」

弱弱しく自身の勝利を確信する。

全身が痛い。

文字通り身体の全身の筋肉が切断したような錯覚を覚える。

もしかしたら本当にそうなっているかもしれない。

なんにしても——次は、あかりの番だ。

残念ながら、もう自分の力で助けを呼びに行く事は出来そうにない。

黒男は渾身の力を振り絞り、ポケットからスマホを取り出す。

大丈夫、スマホは無事だった。

震える指でスマホのロックを解除。

電話帳を開き、二つしか登録されていない電話番号のうちの一つを選択する。

申し訳ないけど——今、自分はその人にしか連絡出来ない。

「もし、もし——」

変わり者の二人

結構大事になってしまった。

そもそもあの危険生物——バフオメットはテレビで話題に上がるほどだった。

それが小学生の手によって殺されたというのは、残念ながら誰にも知られていないけど。

そしてその本人はというとバフオメットを倒す代償として、全身筋肉痛を引き起こしていた。

——それだけで済んだのか、と本人は拍子抜けしていた。

なんなら骨の一本くらい覚悟していた。

なにせよ彼はそういう理由でしばらく家のベッドで横にならざるを得なかった。

病院には行ってない。

行くと、なんか面倒臭い事になるような気がしたからだ。

そんな訳で脱走した大型の危険生物の事を皆が忘れた頃、改めて黒男は病院へと向かうのだった。

とはいえ、今回は今まで通り歩夢に会いに来たわけではない。

聖園あかりに会いに行く為だった。

あのあと、どうなったのだろうか？

連絡を貰っていないし、貰う手段もない。

そういう訳で、直に足を運ぶしかないのだ

「あら、黒男君。もう大丈夫なの？」

家を出ると、植木に水をやっていた歩夢のお母さんと出会う。

……あの時、彼が連絡をしたのは彼女だった。

いきなりだったのにすぐに緊急事態を察した彼女はすぐに事態を解決すべく行動を開始した。

車に乗って現場に到着。

その後は彼の要望通り病院に連絡した後、車に乗ってその場から離脱した。

あの獣の死体を見たのにも拘らず、歩夢のお母さんは悲鳴一つ上げ

なかった。

それどころか、何が起こったのか尋ねようとしなかった。

「男には秘密の一つや二つ、必要よ」

とは本人の談。

「ま、正確に言うとはアレ。貴方が殺した事がバレたら世間的に大変な事になるでしょうからね」

しかしそれでも、あかりの事は隠し切れない。

実際にバフォメットの餌食になってしまったのだから。

あの後、ベッドの上に拘束されていた黒男はスマホを使って情報を集めてみた。

バフォメットがあのかの尻尾の蛇から注入する毒。

それは人間の身体を、すぐに自分の子供を産めるようにする。

具体的に言うとは骨盤を含めた腰の形を強引に変形させるらしい。

他にも生々しい話を聞いたが、しかし一応現代、外国では医療用として活用されているなど悪い話だけではない。

何にせよそれを打ち込まれたあかりがただで済んでいる訳がなかった。

「今日は送っていかなくても良い？」

「いえ、自転車で行きます」

「気を付けて行くのよ」

そんな訳で自転車に乗り、病院へと向かう。

ちりんちりんと操縦しながら考えるのは、これからの事だ。

(これから、歩夢とどんな顔をして会えば良いんだろうな)

自分の力を理解すればするほどに、もつと上手いやり方はなかったのだろうかと考える。

欲望のままに動く事を後悔はしない。

そんな事を今更後悔出来てしまうほど、自分は善人ではなかった。

何ならそれを通じて歩夢のいろいろな事を知れて良かったとすら思っている。

自分は最低な人間だ。

だから、そんな最低な人間が、これからも歩夢と一緒にいても良い

のか。

そんな風に考えてしまう。

きつとこれからも、自分は歩夢と一緒にいる限りこの力を使うだろう。

そうして歩夢を汚していき、いずれは――

(いずれは)

そうなって欲しいと思う。

思うから、やはり一緒にいるべきではないのではないかと思ってしまふ。

(……)

そうこうしている内に、黒男は病院へと辿り着く。

しかしすぐに病室へと直行する気分にはなれず、代わりに周囲の庭になっっているところを歩く事にする。

季節はもう冬に近くなっていて、空気は若干肌寒い。

いつの間にか夏の陽気は消え去っていた。

一体、何時からだろうと思いつくそうにも思いつくせない。

きつとそれは、誰も同じだろう。

そうして黒男は気づいたら以前、あの獣と対峙した場所へと足を運んでいた。

一体どうなったのだろうかと興味を持っていたからかもしれない。

……しかし、そこは特に変化はなく、獣が折ったと思わしき枝の傷すらその場に残されていた。

あの日の出来事はこの世界的には些細なものでしかなかったと、まるでそう言われているようだった。

「黒男さん、奇遇ですね」

声を掛けられ、振り返る。

聖園あかりだった。

以前と変わらず厚着気味の格好をしているが、違うところといえば今日はロングスカートを履いている事だろうか？

「大丈夫なのか？」

それはあの獣に襲われた傷は問題ないのか。

そして元々の病弱な身体は問題ないのか。

何より、大人達は茲にいる事を許しているのか。

それらを含めての言葉だった。

しかしあかりはそれに対しては答えず、代わりに「どうしてここにいるのですか？」と逆に尋ねてきた。

「お姉さまに会いに来たなら、早くいけば良いのに」

「……いや、今日はお前に会いに来たんだよ」

「あかりに？」

「ほら、その。大丈夫なのかなって思ってた」

その問いに対して、あかりはくしゃつと表情を歪める。

「どうやら自分は質問を間違えたらしい事は、黒男もすぐに分かった。」

「大丈夫、なのかなあ……」

きゅつ、とそこであかりはスカートの裾を絞ってみせた。

そうする事で彼女の腰回りが浮き出る事になった訳だが。

「私、こんなになっちゃった」

まだ第二次性徴を迎えていないらしかった、すらつとした肉体。

胸の膨らみもまだなく、しかしその腰だけが異常に発達していた。

お尻だけが大人になっている。

言葉で言うのは簡単だが、しかしその身体の変化を本人が受け付けているのかどうかについては、彼女の表情を見れば火を見るよりも明らかだった。

「こんな、こんな……っ、全然、キモチワルイ、でしょう？」

「それは」

「気持ち悪いよ……こんなお尻、お姉さまが見たら絶対、私の事を嫌いになっちゃおう」

彼女は涙を見せないけど。

だけど心中で泣いている。

「黒男さん、私はやっぱり貴方が嫌い。これからも一緒にお姉さまといられる貴方が、妬ましい」

「俺は」

知らず内に、黒男の口は勝手に動いていた。

「俺はお前が羨ましいよ。どこまでも心が綺麗で、だからそんな風に歩夢と一緒にいられないって考えられる——俺にはそんな風に考えるのは、やっぱり無理だろうから」

「そう、ですか」

「——なあ、あかり」

黒男は言う。

「俺はお前の命を救った、言ってしまうえば命の恩人だ」

「……それがどうかしたんですか？ 命の恩人だから、何かこちらに何かする権利があるとでも、そう言いたいのですか？」

「そうだ」

「は、はっ——それなら、どうするのですか？ 良いですよ、私に何をさせたいのですか？」

「あいつと、歩夢とこれからも友達でいてくれ」

黒男の言葉にあかりは戸惑い、瞳を揺らす。

「それは、でも」

「あいつにとって必要なのは、きつとお前みたいな心が綺麗な人間だ。それにきつと、あいつはお前の身体が多少変わったって、何も変わらない。そういう人間だったのは、お前だって分かるだろう？」

「それは——分かってます！ けど」

「独りぼつちにさせないでやってくれ」

「……まるで、貴方は。お姉さまと一緒にいられないと言いたげですね」

あかりの問いに、沈黙せざるを得なかった黒男。

そんな姿を見て、あかりは「はあ」と嘆息する。

「……貴方こそ、お姉さまと一緒にいてください。お姉さまは、貴方の事を話す時、とても楽しそうでした」

「そう、なのか？」

「嬉しそうにしないでください、腹立たしい——まったく、変わりたいなら変わりたいですが、それも今の身体では無理でしょうから」

ふー、ともう一度息を吐くあかり。

それから力ない笑みを浮かべるあかりは続けた。

「とはいえ幸い体の方は何とかかなりそうです。ので、時がやってきたら私も、ええ。私も絶対お姉さまのところに行きます……その時は、絶対貴方のその場所を奪って見せますから」

覚悟してしてください。

その言葉に黒男は最初こそ困惑したものの、すぐに「仕方がないな」と相槌を打つ。

「俺はお前の事を、多少は戦友ともだちと思っている」

「私は貴方の事を、多少は戦友ライバルだと思ってます」

「だから、これからも歩夢と仲良くしてやってくれ」

「貴方も、これからお姉さまと一緒にいてあげてください」

そして、二人は少しだけ恥ずかしそうにしながら握手をする。

それは傍から見れば——とても仲の良い友達同士のように見えた。

どこまで普通な君は

なんでもあかりちゃんがいらないらしい。

脱走したのだそうだ。

マジかよ、彼女ってそんなアグレッシブな女の子だっけ？

少なくとも原作ではおしとやかで如何にも病弱って感じだった気がする。

そして暇を持て余していた私は折角だからと彼女の捜索に参加。

一体どこにいるんやーい。

そんな風にきよろきよろと周囲を見渡し、病院の外に出る。

とはいえ、当てがある訳ではない。

それは他の看護婦さん達と同じで、だから足でしらみつぶしにしていかなくはならないだろう。

なんて言うか私、あかりちゃんの事をあまり知れてないんだなと思っただ。

こんな事をするような女の子だとは思ってもみなかったし、どこに向かったのかも分からない。

なんか自信なくすなー。

結構、仲良くなったと思っただけだとしても、実は案外彼女は私に心を開いていなかったのかもしれない。

とはいえ、今その事を後悔してもしようがない。

私は兎に角病院の外を見渡しながら歩き——そして結果的にその場所へと辿り着く事が出来た。

黒男とあかりちゃんが、仲睦まじそうに握手をしている姿を。

え、え？

マジで？

二人、今まで全然仲良さそうじゃなかったのに、いつの間にそんなに仲良くなったの？

なんか手を握り合ってそれでニコニコ笑い合ってるし、一体どうなってるの？

全然知らなかったんだけど。

私、びっくり。

えー、嘘だあ。

そんな風に仲良くなる、エロゲ的に言うのなら好感度アップイベントがあつたのならば私も観たかつたなー。

それにしても、凄いやん黒男。

流石は未来のヤリチン竿役間男。

やる時はやるって訳だ。

あんなに微妙な関係だったのに手練手管で自分の虜にするなんて簡単に出来る事じゃない。

そういう調子で頑張るんだ、黒男。

これからも、そんな風にいるいろな女の子を自分の虜にして、好きにして、それで――

ずきつ。

「……？」

「なんか、違和感を覚えた。

「だけどそれはすぐに消えてなくなったので、多分気のせいだったの
だろう。」

「とにかく、今は黒男の事だ。」

「彼はどうやら今、竿役間男として覚醒しているか、その兆しが出て
いるんだと思う。」

「あのあかりちゃんの笑顔が良い証拠だ。」

「あれは、私にすら見せなかつた明るい笑顔。」

「それを引き出せたのは単に彼の努力、尽力故だろう。」

「素直に、私は拍手を送るとしよう。」

「そんな事をやったら今、こうして隠れて見ているのがバレるのでし
ないけど。」

「なので、ここは大人しくにやにや笑いながらこの場から退散すると
しよう。」

「頑張ったね、黒男。」

「これからも頑張るんだ、黒男。」

「そうやってこれからも頑張って女の子を墮としていって。」

「それで——」

Snow step

雪、香る季節

復活DA!!

という訳で私はようやくと学校生活に復帰する事となった。

とはいえ学校のクラスの連中でも仲が良い奴は適当なタイミングで病室にやってきていたので、なんて言うか「やっとか」って感じはしなかった。

あるいはそれは聖園あかりちゃんがいて私を退屈にさせなかったからかもしれない。

なんにせよ、私は学校へとやってきた。

久しぶりなので学校の授業に付いて行く事が大変——という事は流石にないけれども。

とはいえ、ここ数か月いない間にクラスの空気は変わったみたいで、それに対して違和感は覚えた。

これなら、多少無理でも早く退院するべきだったか？

いやでもなんか皆過保護で病院から出してくれなかったんだよなー。

「よ、よお」

と、教室に着いて早々話しかけてくる奴がいた。

えっと、彼は……

「シユガー&ソルト君？」

「なんだその面白くない面白動画配信者みたいな名前は！」

「いやなに、その矛盾していそうで矛盾していない言葉は……佐藤太郎だけに、シユガーとソルト？」

「別に俺は佐藤太郎じゃねえからな!」

そして相変わらず彼の名前は憶えていなかったが、とにかく夏休みの夏祭りで会った連中の一人だという事は分かった。

「その、大丈夫なんだよな？」

「え、心配してくれてたの？」

「そ、そりゃあ心配するだろ！　だ、だってその。俺が原因みたいなところ、あるし」

「はー」

まったく、もう。

私は額に手を当て目を瞑り、それから彼を下から目線で見る。

「別に、貴方が悪いんじゃない。私が勝手に不注意であんな目にあっただから、貴方が気に病む必要は、ない」

「う。で、でも」

少し意地を張っているのか顔を赤くして反論しようとする彼に私は先回りして「もし罪悪感があるなら」と言う。

「これから、仲良くしてよ佐藤太郎君」

「……森川歩人だよ」

「ん、分かったモブ人君」

「……………もうモブ人で良い」

という事で、彼の名前は今からモブ人と言う名前になったのだ。た。た。

マジでか良いのか。

で、そうこうしている内に遅れてやってきた黒男が登校してきた。

何となく話し込んでいた私とモブ人を見て「なんだこいつ？」みたいな表情をする。

「おっす黒男」

「よ、よー黒男」

「…………」

じつとモブ人の方を見、それから私の方を見る。

それから「はあ」と溜息。

「……仲良さそうだな」

「クラスメイトだしね」

「わ、悪い。邪魔だったよな？　俺、どっか行くわ——」

「え、良いのに。一緒にまだお話ししない？」

「…………殺す気がこいつ？」

何やら小さく呟いたが、あくまで独り言だったように聞き取れな

かった。

その代わりにモブ人は黒男の方を見て、

「そう言う訳だから、よろしく頼むわ」

「……よろしくしたくねえ」

「ちよつと黒男？」

「歩夢、ちよつと来い」

「え、ちよ」

と、黒男に手を引かれて教室の外へと連れていかれる。

あともう少いで登校時間が終わるからか、登校してくる生徒は疎らだ。

「なんであいつと仲良さげなんだよ」

「なんでかな」

「なんでかなって」

「いや、普通に話したら面白い奴だなーって、それくらい？」

「……そう言えばお前はそういう奴だったよな」

この野郎、とジト目で見てくる。

「歩夢」

「んー？」

「俺とお前は、その、幼馴染だよな」

「何を当然なこと言ってるの？」

きよとんとして首を傾げる私に彼は続ける。

「じゃあさ、その。もう少しで来る——」

と、そこで彼の言葉を遮るように「きんこん、かんこん♪」と鐘の鳴る音がする。

私が「あ、もうホームルーム始まるね」と言い彼の方を見ると、何やら黒男は口をもごもごとさせていた。

どうやら話を強引に切り上げられた事がショックだったらしい。

「大事な話だった？」

「い、いやいや！ 別にそういうのじゃないかな!？」

「んー？」

「と、とにかくさ。お前も付き合う相手は選べよ？」

「私だって子供じゃないもん。危ない人には近づかない、分かってる」

「……よくよく考えるとお前の方が危ない人だよな」

「なにか言った？」

「いや、なにも」

とにかく、もう学校の登校時間が終わりホームルームが始まる。
私達は一緒に教室へと戻り、自分の席へと着くのだった。

噛み合わない歯車

……なんか最近、黒男の様子がおかしい。

「おかしくない?」

「イヤ、私に聞かれても困るわよ」

よそよそしいというか他人行儀というか、とにかく私に対しての態度が変なのだ。

「変じゃない?」

「なにがよ」

「お母さん、何か知らない?」

「知ってたら既にその事を話しているわよ」

苦笑するお母さんを見て、それもそうかと私は頷く。

なんにせよ彼の様子が変なのは変わらないし、いつもと同じ態度で接してくれないから私にとってはかなりストレスになっている。

いつそこう、お猿さんになって襲い掛かってくれる方がこちらとしては対処しやすいとすら思っている。

それならば普通に殴ってしまえば良いからね。

ただ距離を置かれているとなると、まずこちらから近づかなくてはならない。

しかしそれでもなおの事距離を置かれるから反応に困る。

マジか、絶対避けられてるじゃんこれ。

「んー……」

「ねえ、歩夢?」

「なあに、お母さん」

「そんなに不思議に思うのならば、直接聞きに行けばいいじゃない」

「いやでも、それだと避けている本人に悪くない?」

「避けているって事は何かやましい事があるって訳だし、それは貴方も関係しているのだから、それを知る権利くらいはある筈よ」

「そう、かなあ……」

「もしくは本当に知られたくないのならば、最初から「止めて」と言っている筈。それをしないって事は、あるいは貴方に知って欲しい、追

及して欲しいって思っている可能性もあるわ」

「あー……」

確かにそれはありそうだ。

黒男って若干ツンデレが入っているし。

まさか厨二よりも先にツンデレになってしまおうとは思って見なかったけど、だけどそんな人物だからこそこちら側から近づいて問い詰めるのも大切な手段となって来るのかもしれない。

「そかそか……うん、ありがたうお母さん。何をすればいいのか分かったかも」

「ええ、それなら良かったわ。良い話があったならば、ちゃんと後で聞かせなさいね？」

「うん」

領き、それで早速私は家を出て彼の家へと向かう事にする。

今日は日曜日、彼も家にいる筈――

「……ん？」

彼の家を見ると、何やら黒男の自転車が置かれていないのが見えた。

どうやらどこかに出掛けているらしい。

「んー……」

なんか、出鼻をくじかれてしまったような気分だ。

え、っとどうしよう。

「……遊びに行こうかな」

という事になった。

とはいえ、公園とかではない。

折角なのでここは私も自転車に乗ってショッピングモールに出掛ける事にする。

もしかしたら黒男に出会えるかもしれないとか、考えてはいない。

そして数分後、私はショッピングモールに辿り着いたのだが。

「モブ男君？」

「モブ人だよ！」

「モブなのは良いんだ……」

「あだ名としてこちらも受け入れたからな……」

「なんかモブ男、もとい、モブ人君と出会った。」

「正確には歩人君。」

「まさかこんなところで出会うとは……」

「いや、お前今日は一人なのか？」

「一人だと悪いの？」

「いや、もしかして黒男と一緒になのかなって思って」

「……別に、あいつと常に一緒に訳じゃないよ。私だって一人の時はあるし、あいつも一人の時だってある」

「そう、か」

「神妙に頷いた彼は——そこでぎくりと身体を硬直させる。」

「何やら私の背後を見ているようだ。」

「私は彼の視線の先にあるものに興味を引かれて後ろを振り返り——」

「あ、こちら——」

「……………え？」

黒男とあかりちゃんが仲良さそうに、まるで仲の良い友達であるかのように拳を当て合っている姿を、私は見た。

歯車合わせ

「むっすー」

ずるずるずるずる。

シヨップینگモールで購入したドリンクを啜る。

腹立たい事に購入した店は紙製のストローを採用していたらしく、だから二重で気分が最悪だった。

「そ、その、な。機嫌直せよ」

現在、シヨップینگモールから少しだけ離れた場所にある公園の中にあるベンチに腰かけていて、その隣にいる彼はどこことなく気まずそうにモジモジしている。

「……ラクトアイス君」

「もはや原型がほぼない上に、せめて旬な時にそう言う間違いをしてくれ。歩人な？」

「歩人君、あの二人何してたんだと思う？」

「うえい!? え、えとその。遊びに来てたんじやないかな？」

「……だよねー」

だとは思っていた。

そしてこの状況、私には都合が良い筈。

恐らく毒島黒男と言う人物は既に竿役間男として覚醒しているのだろう。

まあ、実際のところ言うところ聖園あかりちゃんはまだ主人公たる平井直人とは遭遇していないと思われるので寝取られどころかBSSですらないのだが。

ともあれ、竿役としては頑張っているのかもしれない。

小学生で竿役とかすげーなおい。

最近の小学生は進んでんなー。

うん。

私も彼が美少女達をその肉棒で食い散らかすその様を期待していたのは事実。

だから今、私が落胆を隠しきれていないのはやはり彼が私の見てい

ない間に関係を進めていたからだろう。

そうに違いない。

でないと説明がつかないのだから。

うーん、なんだかいつの間にか関係を見ていない間に進められていて、完全に私は外部の人間みたいになっている。

いや、実際外部の人間なだけ。

あるいは私はただのモブ、原作では彼の竿の中毒になっていた女の一人なのかもだけど。

そうだ、うん。

なんていうか、久しぶりに自分の事を見つめ直した気がする。

私はあくまで傍観者。

よくよく考えてみると、私って結構彼に近づきすぎているんじゃないだろうか？

その状態の方が観察しやすいってのもあるけれども、しかしだからといって接点を持ち過ぎては本末転倒な気もする。

だから、少しだけ彼とは距離を置くべきなのでは？

やっぱり、幼馴染という関係だけを残してしばらく彼とは離れておくべきなんじゃないだろうか。

幸い、今の彼は聖園あかりちゃんと仲良くなろうとしているんだから、私の入り込む隙間はないだろう。

うん、だからいい機会だ。

私、ちよつとだけ彼とは離れて様子を見て見よう。

「ごめん、歩人君。心配かけた」

「大丈夫、なのか？」

「それよりさ、折角こうして会ったんだし、どこかで遊んでかない？」

「……大丈夫なのか？」

「なにが？ ——ほらっ、この公園初めて来たけど、面白そうな遊具結構あるじゃん！ だから——」

「——歩夢？」

声を掛けられる。

今、最も聞きたくない声だった。

それでも私は出来るだけ平静さを装いながら、声のした方向へと振り返る。

「あ、毒島君じゃん。どしたの？」